

農業祭

瀬本あきら

1

虹色が目にしみた。闇の中でその一画が、マジックミラーの裏から窺う隣室の情景のように、密やかな快感を伴ってくりひろげられていた。

室の窓枠すれすれのところで、虹のアーチは浮かび、それを眺めている男女がいた。

ゴムの木の鉢や、その傍の書棚、室の中心の応接セットが、鈍いてりをもつて、急に生きもののよう動き出した。それらは空の虹とは違いくすんだ無彩色の流れのように思えた。

動きは厚い褐色の壁のようなものに遮られるとふいに止った。そして、いままでほぼ水平に左方から右方へ動いていた流れが、その褐色の壁の所から上下の動きに変わった。褐色の流れができた。よく見ると、その表面は小さい粟粒状の、ざらざらしたような斑点を無数に生じていて、心もち波うっていた。色は時に橙色にも変わった。

闇の中のその一画が無意味な色の流れに変わっていた。さっきの虹を眺めていた男女はどうしたのだろうか、という不安が場内に沈潜しているように思えた。と、その流れはしだいに細くなり、産毛のような無数の透明な軟毛さえ認めることができた。それまでは張りつめたものが漲っていたが、その時場内の空気が一瞬波打つのが分かった。

桑沢得郎は、闇の中の夥しい熱い視線を感じていた。それは、正面の一画に集中するはずのものが、何故か自分一人に注がれているような悪寒がしてならなかった。

カメラワークからいうと、一見無意味に見えるその撮り方も、実は重要な意図が隠されているかも知れない。でも桑沢はこの映画の芸術的意味を考えるゆとりさえなくしてきていた。全く居心地の悪いものを感じた。さきほどの男女は忽然と消えたかと思うと、いつしか男の方の浅黒い肌をカメラは嘗め回していたのだ。桑沢は己れの目を疑った。そして、背に食い込むパイプ椅子をことさら痛いものに思った。

会場にはたくさんパイプ椅子が前日の放課後に並べ置かれた。生徒らは年に一度の映画会があるというので、はずんで働いていた。わずか四十名で、七百五十余りの椅子が秩序正しく並べられた。桑沢はその彼らの生き生きとした顔を仔細に観察していて、又一年が無為に過ぎていったという怠惰の感慨を押し殺していたのだった。今見ると、スクリーンの反射光が鈍く彼らの首から上を浮かび上がらせ、獄門首の列を思わせていた。椅子は整然と、全く同じシルエットで闇の中を白くさせていた。

その会場の一瞬の動揺は、上手の上級生のいる位置から起こり、草の戦ぎのように会場一杯に広がって行ったようだった。闇の中でもそのようすはよく分かった。

桑沢は、うつ伏せにソファに寝そべっている若い男を映し出しているスクリーンから目をそらした。その時、フィルム上の傷の箇所がチカチカと光っていた。

体育館の中は十一月も半ばともなれば、床の方から冷えが昇ってきて、足の裏は、上履をはいていても凍えるようになっていた。しかし、上半身は却って生徒らの若い熱気のためほてっている。横に並ぶ生徒の椅子の列の両側に、職員用の椅子が縦に二列ずつ置いて

ある。職員の総数は六十名位だが、席の数は優に百位はある。それは特別な来賓用の席も同時にしつらえてあるからである。しかし両側の席はまるで閑散としていた。ことに桑沢の占めている付近には、小葉田教諭と、相沢教諭がいるだけで、上の席にいる教頭の白髪を遠くから透かして見ることができた。相沢教諭は寒そうに背を丸めて会場にはいるや、桑沢の横の席を一つ隔てた隣りにそくさと座り、ものの二分も経たぬうちから居眠りを始めていた。小葉田教諭は眼鏡の顔を微動だにさせない。画面からの反射を受けて二つのレンズが白く輝いていた。

小葉田淳男はこの映画から何を感じているのだろうか。数席隔てた下の方の席に静かに座っている男を、桑沢は横目で見た。農業祭で、映画観賞をと企画したのは小葉田であった。しかし、これは・・・、全くどうなっているんだ。心で呟いた。

会場の空気が淡く濁っているのは、後ろの方から映写機が放つ光の筒の中を見るとよく分かった。その光の円筒の青白い色彩は、映写機の放光口付近が最も濃く、先端にいくほど薄くなり、鮮明な画面の前では見えなくなった。

女は、しかし裸の男に近づこうとはせず、赤いロングスカートをひきずるように、又窓辺に歩いていった。そして軽蔑したような眼差しをして、しきりに何か吐き棄てるように喋り始めていた。桑沢はその早口な会話の中から、・・・愛、とか、・・・別れ、とかの断片的な文句を拾い取るように聞いていた。そして時々又、チカ、チカ、とフィルム

の傷が光っていた。

突然、長いカーテンを垂らしたようなロングスカートが大きく揺れた。女は小走りに書棚の前にいって、その前にしゃがみ込むと、さし込んであった数十冊の本の中に手を入れて、手当りしだいに把んで取り出すと、投げ始めた。ぶ厚い辞典や、背文字のはげかかった古い本が宙に舞った。カメラは、そして女のくしゃくしゃになった顔をアップにしていた。きれ長の目から涙が溢れた。女は本の山にくずおれた。すると、女の左手が一冊のノートを握っていた。そしてノートの表紙にこんどは顔を押しつけ、そしてふいに鳴咽を呑み込むように、小鼻をふくらませ、きっと裸の男を睨んだ。そして急に起き上がり、ベッドの端に駆けていくと、後ろから裸の肩を抱きしめ、赤い口唇を首筋におし当てた。すると会場の前の方の席から、ひき裂くような口笛が鳴り響いた。そして横からも、後ろからも、笑いや、ヤジの聲が巻き起こった。

桑沢は、ここが学校の中の場所であることを忘れていた。どこか場末の汚い映画館か、さもなくば、映画と上演、などという看板を掲げた裏町の小屋のように錯覚した。生徒らは口々に卑猥なことを画面に投げつけていた。桑沢は衆人環視のうちに、どこかの薄汚い小屋の隅で小さなショーを見ているような奇妙な羞恥を感じていた。最前の会場の緊張は嘘のようだった。そして又、小葉田の横顔を見た。口許に笑いが洩れていた。右脚を小刻みに貧乏ゆすりさせていた。相沢はいよいよ深い眠りを貧っているようだ。

桑沢はその喧騒の中から逃れる隙を窺っていた。こんど画面が変わる時に・・・こんなところで、こんな映画を見ているなんて・・・、しかもこんなに夥しい人間の中で・・・。

しかし彼の意志に反して、画面は依然と裸の男とロングスカートの女の粘っこい演技が繰り返られていた。会場はますます騒然としてきた。闇の向こうに腰かけていた教頭が、見かねて三年生の座っている席の中央の方に歩み出たようだ。白髪が闇の中でくすんだ青

い色を帯びて見えた。しきりに両手を振り回して、静まるように促しているようだ。すると前の方の者は静かになったが、まだ後部の下級生が動揺していた。中には教頭の大仰な仕種を見て失笑するものもいた。

小葉田はくると後ろの映写技師の方を振り返ると、おもむろに腰を上げ、その方へ重い足どりで歩き始めた。

小葉田と技師は、しばらく口論をしていたようだった。が、やがて又、こちらの方へ帰ってきた。彼が元の席に納まると、ふっと画面の絵が消えた。どつとどよめきが起った。

桑沢は今だと思った。この騒ぎのうちに姿を消そうと思った。職員室で、他のほとんどの同僚がしているように、農業祭のために生まれた全く自由なのびのびした時間を、気楽な雑誌でも読んで、時に猥談でもして過した方がずっとましだったかも知れない。暇にまかせてこんな会場にはいつていったのが間違いだっただ。そう思ったことが急に勇気づけた。

が、心持ち腰を浮かせ、退出しようと思を決したとたん、又急に画面が明るくなって、再開されたようだった。生徒たちは又水を打ったように静かになった。桑沢は突如静粛になった会場を敗け犬のようにごそごそ出る姿を思うとその決意がにぶった。

画面一杯に青い色が満ち溢れた。

すると、いつの間にか小葉田が隣の椅子に腰かけていた。

——いやね、ちょっとフィルムをとばさしたんですよ。試写を見てファーストシーンがどぎついと思ってたんですよ。でも、型通りの教育映画じゃこのごろの生徒は面白がりません。それにちょっとした活を入れたかったんでしてね。

——ひどく騒いでしたね。

——あいつら、あれで結構楽しんでますよ。農業祭は生徒にとっては息抜きですからね。

——でも、さっきはびっくりしました。ああ出てくるとは思いもありませんでした。教頭なんかもっとびっくりしたかもしれない。

——いい葉ですよ。

そういうと小葉田は上座を透かして見ながら腕を組み、背もたれに体を押しつけるように座り、黙り込んでしまった。

小葉田の眼鏡の中に、青い色がゆらゆら揺れているのが認められた。それは画面の溢れるばかりの色が映っているのだ。桑沢は改めて壇上のスクリーンを見遣った。

海の色を見て、初めて桑沢はこの映画の季節が感じられた。初秋だと思った。

波は突き出た岩に砕け、飛沫が男と女の全身に降りかかっている。人気のない海岸。男と女はしかし、初秋の日差しを濡れた肌一杯に受けていた。男は膝を抱いて座り、女は白い水着の肩を聳やかして、遠くを眺めながら立っている。と、女は白い水着姿で、ひよいと岩から飛び降りると、一心に砂浜に駆け出した。男はあわてて後を追いかける。

桑沢は目を見張った。さっきの澱んだ画面とは対照的な、はち切れんばかりの躍動感に満ちていた。カメラは女の後を追う男の側に位置づけられているようだ。執拗に、走っていく女の背の方から、一定の距離を保って撮る。女の背から腰、そして脚のはずむ動きが一杯に映し出される。激しい動きがしだいに誇張され、やがて体の各部分の肉の団塊がゆっくり緊張と弛緩を繰り返すのが分かる。高速度撮影だ、と桑沢は思った。女の水着の肉体がゴムのように伸び縮みしているようすが、手にとるように分かる。息づまる時間が続

く。会場は又、官能的空氣に包まれていく。桑沢は無意味と思えるそのくり返しにいつしか興奮している自分に気づき、闇の中で顔をほてらせた。

そうさ、まとまったストーリーなどないのだ。この頃の映画ときたら、やたらとこんなが多い。桑沢はそう考え、こんな変哲のない海のところまで自分を連れてきたこの映画にいらいらしていた。

男と女は波を見下ろしていた。

波は、沖の小さな島の周囲を白くくるんでいる他は全くないのも同じで、鱗のような海面はただ青い広がりを見せていた。男はふと女のそばから離れていった。

画面に大映しの男の体軀があった。波を見下ろす男の逆光を浴びた姿が、黒くえぐったように突ったったっていた。男が佇む時間は桑沢には相当長く感じられた。男は凝っと波を見下ろしていた。

そして急に又、画面一帯に青い光が満ち溢れた。光はゆらゆらと揺れていた。よく見ると画面の上部には白い氣泡が夜光虫のように蠢いていた。その泡が突然左右に分かれた。そして白い無数の泡に包まれた、青白い物体が突き刺さるように割り込んできた。先端には黒い海藻のようなものがゆらめいていた。――女はいきおいよく海中に飛び込んだのだ。カメラは水中からその鮮やかな姿をとらえていた。

女の柔軟な体は大きくしなうって水の中を動き始めた。女の長い髪は黒い藻のように肩の辺りに開いている。水中眼鏡や酸素ボンベを装着していないのに、自由に水中を泳ぎ回っているのだ。両眼はきちんと開かれている。白い水着が青ざめて見える。口許の紅もさめて、魂の抜けた青白い物体が、空中に浮かんでいるように見える。周囲は全くの青い光の世界で、その物体の他、何物もない。男はどこへ行ったのだろうか。

ほんの数十秒のことで、女が水中に刺さってから浮上の姿勢をとり始めるまでは、短い時間の流れだった。が、桑沢は軽い吐き気を感じた。胸の中に今まで蓄っていた焦燥と羞恥が一時に込み上げてきたかも知れないと考えた。しかし、その胸にわだかまるものは、それと全く異質のような氣もした。

桑沢は画面を見まいと、しきりに目をつむるよう努力した。しかし意思に反して、よけいに前のめりの姿勢になり、画面に釘づけにされた。

女は、水の中をしばらく泳ぎ回っていたが、急激に両脚を腹の辺まで縮めたかと思うと、一気にそれを伸ばし、水を蹴って浮上を始めたのだ。腕も力づくよく水をかいている。水面の明りが大分遠くに見えている。女の腕はその明りを早くつかもうと、鋭く水に食い込む。そのたびに泡が夥しく辺りに散った。しかし動きはもどかしく遅い。水面はやはり遠くに光っている。さっきまでの海底でのゆるやかな動きが全く嘘のように思える。女は鋭く水をかく。それは窒息寸前の悲愴な暗さを思わせた。すると、画面一杯に女の喘ぐ顔が又、スローモーションで映り出した。女は口を歪め、眼を鋭く見開いて、時々海水を吐き出していた。海水は粘液のようにゆるい動きを見せている。女の肌はチャノーゼのような紫色になる。多量の海水を呑み込むたびに顔が變形する。長い髪が生きもののように揺らぐ。海面はまだだ。顔の筋肉がひどく痙攣しているのが分かる。

女の声にならぬ声が会場にこだましていた。それは死に直面したもののだけが発する重い響きをもっていた。女は海水を吐き出しながら、喉の奥からしきりに声をしばらく出していった。それは演技であることを瞬時人に忘れさせるものがあった。

桑沢は頭から血の気がひいていくを感じた。そして我慢できない吐き気のため、凝つと手を口に当てていた。

画面の女は追いかける死の手から逃れようと必死だった。桑沢の頭に女の喘ぐ鮮明な表情が焼きついた。――出よう。何をしているのか。早く出よう。さあ、早く腰を上げて。桑沢はどこかでそんな声がするのを聞いていた。――そうだ。早く腰を上げてこの忌まわしい会場から出よう。桑沢はそうその声に答え始めた。

パイプ椅子から腰を浮かせると、体をもぎとるように足を一旦伸ばし、そして、船酔いしたような足取りで、体育館の入口へ歩き始めた。小葉田が、

――桑沢さん。

と声をかけたようだったが、振り返ることもできなかった。

重い入口の板戸をきしませながら開けると、鋭い光がさつと被さってきて、桑沢は不意に、あつ、と声を上げた。後ろの会場の奥のスピーカーから、……フカだわ、……・。という震えた女の声がしていた。

板戸を背後でたて切ると、桑沢は眩しい光に襲われて、暫く立ち止まった。足がだるく、思うように動かなかった。体育館の玄関に通ずるコンクリートの廊下の冷たさが、足にしてみた。腰から下が痺れて、他人のもののように感じられる。桑沢は時計を見た。針は九時半を指している。すると、わずか四十分位しか中に居なかったことになる。彼は訝しげに周囲を見回した。朝の陽光が、玄関の方から明るく差し込んでいた。背後の板戸の中から、拡大された男女の話し声が陰に籠もって聞こえてきた。

体育館入口の横の水道の蛇口を一杯に開けた。周りに人影がないのを確かめると、桑沢は、激しくほとばしる冷たい水を手にすくい、思い切りよく顔にかけた。しかし顔の嫌なぬくもりは流し去ることができなかった。顔はその時だけひきしまったように感じられただけで、また、じわじわと熱いものが、どこからか溢れてきた。桑沢はそれを数度くり返し、しまいには諦めた。蛇口を閉じると下の水溜りの中に顔が映っていた。嫌な顔だった。先程の吐き気が腹の底から湧き上がってきた。桑沢は、足でその顔を潰した。上履のつまかけの裏が地面にべったりと付いて濡れた。

生徒のいない石廊下を渡り始めた。日は薄明るくコンクリートの幅の左半分を照らし出している。廊下は油を塗ったようなてりを持ち二十米ばかり続いている。一足歩くごとに頭が前後に大きく揺れるような気がした。桑沢の眼前には、まだ大きな青い色のスクリーンが垂れている気がしていた。盛んに水の中でもがいているのだ。

この廊下を突っ切って向う側の校舎を横切り、そして又、五米ほどの石廊下を往って、そして右に曲がると教員室の硝子戸の前に出て行く。戸を開けて中に入ると、そこには倦怠と、軽蔑と、嘲笑の稀薄な時間が待っているはずだ。おや、あんたは今まで見ていたの、ご精勤なこって、……とかいわれて、そして自分は、苦笑をして、……。ふと、歩きながら桑沢はそんなことを考え、自分の足が自然と職員昇降口に向かっていているのに気づいた。

革靴を履きながら前かがみになった時も、青い海の色が漂っていた。

桑沢は昇降口を出ると北に向かって歩き始めた。陽光は心地よく桑沢の肩を暖めた。風はあまりないようだ。外に出ようと思ったのは職員室の空気を避けようと思ったからばかりではない。この陽光が自分を誘い出したのだ。そう思った。校舎にかぶさるように繁ったメタセコイヤの木陰にはいつていった。木の幹は一抱えもある太さで、茶の樹皮は濃淡を見せて波打っていた。葉は、小葉の一つ一つがすっかり色づいて、彼の目の前を、時々散った。桑沢は上を見上げた。もう所々透けて見えるほど葉は少なくなっている。桑沢の背ぐらいの位置に針金が一本巻きつけてあって、三十糎ばかりのブリサ板がぶら下げであり、これがある年の卒業記念樹であることが示されている。桑沢はその文字を初めて間近に読んだと思った。

桑沢は生徒のいない校舎の並びは無気味だと思った。遠くに見える校門の歓迎アーチにしても、生徒昇降口の原色の飾りつけにしても、その無気味さを引き立てる役目にすぎないと思った。九時半すぎではまだ一般の外来客も、一人も来てはいないようだった。もっとも今日は、プログラムに、「映画会」——ただし、一般のお方の入場はご遠慮下さい」と書き加えてあってはなおさらである。恐らく午後になればどつと昨日のように人波が押し寄せるに決まっている。そう思うと、その間に校舎を一周してやろうという焦りが歩をはかどらせた。

通用門の傍を通りかかった。桑沢は今朝の光景を思い出して見た。

——もっと、その手を上げて！そう、そのぐらい。ああ、動いたらダメだ。

カメラを持った長髪の生徒が、門柱を覆うようにしつらえられた広告板の前に立っている女生徒にしきりに注文をつけていた。女生徒は校内の職員間でも、その美しさを噂しているA子だった。手に大きな紙をもっている。

——左足はもう少し前に出した方がいいな。右足をその後ろへ退いて、そうっ。チーズ！チーズ！

カチャツと、音がした。

——もう一枚！ああっ忙しい。さあ行きますよ。チーズ！チーズ！

A子は白い歯を見せて笑った。ことさら作り笑いをしなくても、こぼれるような笑顔の彼女だ。桑沢は体育館の玄関に立っていて、そのようすを暫く見ていたが、A子の視線とチラと合い狼狽したのだ。すると手に持っていた大きなポスター様の紙を持って、笑いながらこちらに駆けてくるではないか。桑沢は初め、彼女が誰に微笑んでいるか分からなかった。しかしやはり、自分に向かって、ひだスカートをゆさゆさ揺すってやってくるではないか。

いきなりA子は桑沢の顔にビキニ姿の写真がついた外国のポスターらしい大きな紙をつきつけた。そして、横文字のところを指さすと、農業祭にやってきた外人に貰ったんです。がどんな意味ですか、と聞く。社会が専門なのに、分かるものか、というまどいよりも、彼女の大柄な体が被さるように飛んできたことの方に、羞恥を覚えた。自分でも可笑しいほどに動揺していた。すると、成り行きを見守っていた男生徒が、後ろの方で「アイ、キャン、ノット、スピーク、イングリッシュ」と大声で怒鳴った。A子は、見かねたように、

ポケットからバザーの食券を一枚桑沢に渡すと、逃げるように又駆けていった。

桑沢は苦笑した。まだ彼女の匂うような体が、そこに佇んでいるように思えた。どうしてあの時、彼女は自分の所などへ駆けてきたのだろうかと思った。桑沢は瞬時、さっきの吐き気を忘れていた。

生徒は、すべて自分から離れていくのだ。卒業してから、自分の家に遊びに来てくれた生徒がいたのだろうか、と思ってみる。いやいはい、卒業してしまえば全くの他人だ。道ですれ違っても、わざとそれで行ってしまうし、視線が合っても目を伏せて知らぬ顔をする。A子だって例外ではないのだ。その写真を得意そうに撮っていた男生徒だって、そうなるに違いないのだ。桑沢は今体育館の中に集合している大きな団塊は、自分にとって何だろうかと思ったりした。

通用門の所で歩を止めた桑沢は、いつ映画が終わるだろうかと、不意に焦燥の念に駆られた。

——もっと広い所に出よう。

彼はふやけた音響が時々洩れてくる体育館の東側を抜けると、体育館の二階へ通じる階段がだんだら模様の陰を落としている校庭の東の隅に出た。七千九百平方メートルといわれる中規模の屋外運動場である。

校舎の敷地の東端に、南北に通ずるアスファルトの道があり、それは校庭の東の一边をすれすれに真直ぐ北に伸び、北東の角のところで直角に曲がり、北の端を川をはさんでなぞって西に向かって連っていた。桑沢はその直角に折れ曲がった道の角に白く建っている学校の案内標識に目を遣った。——県立天神農林高等学校——と、太く大書されている。

桑沢はその聳える白い巨大な材木の塔を見ると、ある一枚の古い写真を頭に甦らせるのだ。

桑沢は、物置同然の、暗い文芸部の部屋を片づけていた。

古雑誌の山を掻き分け、高窓から差し込んでくる埃っぽい光の中で、仕分けの作業をしていた。人からいわれたのでもない。ただ暇にまかせて少しづつ合間を見てやっていた。学校創立以来の伝統を持つ『龍神』という部の機関誌、外国雑誌、古新聞、反故になった原稿が、所構わず雑然と積まれてあった。部の仕事は、そのかび臭い山に三方を取り巻かれた、狭い板間で行なわれていた。

桑沢は腰が痛くなるほど、前屈姿勢になって作業をしていた。しかし、思ったよりも難作業で、一時間位でその夥しい山の一つを整理しただけであった。必要なものは埃を払い、紙ひもでしばった。そうでないものは、段ボール箱に詰めておいた。それはどうしようもないから、用務員を使って焼却しようと思っていた。そして空いた部屋の右端を腰を伸ばしながら眺め、溜め息を噛み殺していたのだ。すると、黒い床板に手札判ぐらいの写真が貼りついているのが目についた。奇異なものを見つけたかすかな驚きと好奇心から、その写真を剥がそうと爪を食い込ませた。が、写真はぴったり床に貼りついていて、無理に剥がそうとすると破れ目が白く走る。しかたがないから、側にあったバケツの水をぶっかけ、写真がふやけてくるのを待った。写真は長年の古雑誌の山の重みで、床に剥がすことのできぬくらいびったり貼りついていたので。

桑沢は長らくしゃがんで仕事をした上に、又妙な恰好で前屈みになったので、腰を上げた時は自分でも分かるくらい大きい息をしていた。

濡れてしまった写真を手に取り上げ、薄明るい高窓からの光の中で凝っと見つめた。

桑沢は亡霊を見たような気がした。十数年も前に死亡している父が、突然蘇生してその中に青白く立っているではないか。

写真は已に黄ばんで、中の十人ばかりの人物の輪郭も少しぼやけていて定かではないが、父の所だけは一きわくつきりと浮かび上がっていた。人物は前後二列に並び、後ろの方の男たちは多少の微笑さえ洩らして、ある男は山高帽を手を持ち、左端の若い男はむしろにやけたようなつくり笑いの色さえ見せていて、中央の恰幅のいい紳士は、三つ揃のあいの背広を着け、口許に微笑を含んで佇立しているし、前の列の左側の四角な顔の男は、このまま現在のどこかの記念写真の端に座らせてもおかしくないほど現代的で、右端の二人の作業服の男と対照的であった。父は前列の中央に横を向いて放心したように立っていた。数えて見ると合計十一人であった。

他の男たちは一様にポーズをとっているのに、彼の父だけはカメラの位置から視線が大きく外れていた。男たちの足は、すっぽりと針のような草の繁みの中に隠れていた。そして遠くに淡い山並みが見え、その山を真二つに裂くように、男たちの背後に真白く塗った白い柱が建てられていた。

島根縣立天神農業學校用地。

柱にはそう大書してあった。

男たちは誇りを全身に漲らせ、肩をいからしていたが、桑沢の父だけは軽く後ろで手を組んで心持ち目を伏せていて、目は輝きをなくしていた。自分が一番の功労者だといわんばかりの彼らの中で、ひとりしょんぼりしているかのような男であった。こんな所でこうして人目に晒されて立っているのは、恐らく父にとって苦痛だったに違いない。輝きを失った目は却って鋭く桑沢の胸を射た。追いくる暗い影を見据えている厳しさも感じられた。四十位に更けたように見えるが、三十歳前後の時のものに違いなかった。

桑沢は、家の写真帳にも見つけることができないその写真を内ポケットに忍ばせた。

しかし、あの写真は今どこにあるだろうか。眼前の白い学校標識を見遣り、その類似の形が呼びさます回想を不思議に思った。桑沢の父正俊は、この天神農林高校の草創期から二十年間も土木科の教員として勤務していた。その学校に二男の自分がこうして勤めていることに因縁を感じた。二十年間の父のあかの染みている学校で勤めを続けることの意味を探そうとした。しかし、考えれば考えるほど父の影はふくれ上がって、桑沢の全身にのしかかってくる。

彼は父の部屋のようなすを仔細に思い浮かべて、一つ一つ組み立てることができる。隅に製図机があり、その上に計算尺が二本置いてあり、机の前の壁に河川の図や、橋梁の図がピンで止めてあった。そして、ブルドーザーや、大きな名も知らぬ機械の写真が、ビニールに覆われて、周囲の壁に飾られてあった。ヘルメットもあった。まるで土木工事の現場の事務所のようなだった。

二十年間の教員生活は彼にとって何だっただろうか。

天神農林高校は、昭和八年に、修業年限五年、甲種五学級編成で設立認可され、同年八月に入学式を行なっている。桑沢正俊は大学で土木工学を専攻し、卒業当初県内で数年間土木技手として奉職していたが、後初代校長に就任した園山重顕に誘いをかけられ、天神農高農業土木科の主任教員として勤務することになり、校舎設立の事業にも携っていた。当時は三十才くらいで、気鋭の技手であった。

昭和十八年には開校十周年記念式典が挙行されている。そして、同二十三年に学制改革によって、島根県立天神農林高等学校と改称された。同二十四年に、島根県立大津商工高等学校と統合し、名称も島根県立天神産業高校と改められ、同二十八年にまたもとの独立校となり、現在の島根県立天神農林高校となっている。現在の校長で、ちょうど十代目である。桑沢正俊は、独立校となった時点で、退職をしていたので、開校から、全くはえぬきの教員として二十年間もこの学校で教鞭を執っていたことになる。桑沢正俊の事蹟は校内いたるところに見い出された。

天神農高の前身は大正四年に設立された新南村学校組合立農学校で、同八年には天神実業学校に改称。昭和五年には島根県立天神農商学校になっている。

桑沢得郎は、転任の挨拶に校長室にはいった時、そういう歴史が綿々と記された黒い板を眺めて、身をひきしまらせたものだ。壁には歴代の校長の写真が並べてあった。草創期の校長は、一様な型にはまった風貌で、新任の桑沢にはそれがこっけいなほどだった。校長はもうだいぶ前から桑沢正俊の子供だということを知っていたらしく、初対面から昔語りをやり出して閉口したものだ。校長は熱っぽくその手腕をほめ、退出しようとしても、いや全く惜しい人だった、確か六十にまだなっていなかったのじゃなかったかな、などと細い目をして、もう少し話して行きたまえ、などといって自分を離そうとしなかった。あの時の校長の顔が桑沢の前に淡く浮き出ていた。

桑沢はいつしか顔の筋肉が硬張るのを覚えた。そして思わず片手を頬にやった。この学校には死んだはずの父が、どこかで生きている気がしてくるのだ。

分明に判断できないスピーカーの音を閉じ込めた体育館の脇を、屋根の影の線に沿って歩き始めた。

波の上を漂っているような、変に落ち着かぬ足どりが、自分でもよく分かった。屋根の線をなぞって進もう。桑沢は広い野原に迷い出たような心地に麻痺していた。右手に広がる校庭には誰一人いない。

数十歩進んだであろうか。半月形に光る物体が桑沢の目を射た。近づくとその光は体育館の西のはずれに設けられた、円盤投げのサークルから発していた。鉄のサークルの中のコンクリートの右半分がやや傾斜しているのでそこに水が溜り、それが反射していることが分かった。その地点から左側には破れた金網を隔てて庭球コートが二面設けられている。鉄の太い金網は赤茶けて爛れたように変形して、たわんでいた。その中は矩形の広場である。朝の日は、そのコートの向こうの足洗い場にもう当たるほど昇ってきているようだ。

コートを外れたあたりから、緩い勾配になり始め、所々丈の長い草が生えていた。桑沢はその丘の登り口を上がりかけていたが、先程から、背後に誰かの射るような視線を感じていた。桑沢は歩みを止め、反射的に振り返った。すると、体育館の二階の、窓の内側で、黒い影がこちらを眺めている。そこには体育の教員が詰めている教官室があったのだ。人影は黒い窓の中から自分を最前から見つめていたのだと気づくと、何か後ろめたい気持ちになった。四人の教員が常時そこに詰めているのだが、彼等とてそこで精励恪勤仕事を続けている訳でもあるまいと思った。が、中にいる者と外にいるものとは、そこに判然と差のつくことは確実だと思った。そして一層消え入りそうにみじめになってきた。人影はまだ凝っとこちらを窺っている。何か咎められているような気がしてくる。桑沢は暫くた

めらった後、その影に不意に軽く会釈した。と、影の男はふっと消えた。

——あれは誰だったろうか。体育主任の片桐か、それとも、太った小川かも知れぬ。桑沢はその四人の顔をつぎつぎに思い浮かべた。——いや、もしかしたら校長だったかも知れぬ。よくあの部屋に話をしにいくと聞いていたから。

不意にそう思っても見た。

桑沢は急に目が貧血したようにぼやけているのに気づいた。そしてこれから登ろうとする小さい丘がひどく高いものに思えてきた。校地の西端は丘になっていて、その中腹の辺から牧柵が連っているのが見える。桑沢はその牧柵が自分を搦めとる巨大なワナに見えた。牧柵は、黒く焼いた杭が無数に建てられ、その間を数本の銅線が張り巡らしてあって、微電流が流れている電気牧柵である。よく見ると黒い杭に白い碍子が数個どれもに取りつけてある。そして、それを注意する白い立て札が建っている。人間にはかすかに感じるだけの電気だが、牛にはそれが相当の刺激になるのだと聞く。

女の尻のようなならから丘を登りながら、又、校長のことばを思い出した。今、こうして登っている丘一帯は、正俊が築いたものだとか校長は説明した。畜産という分野に縁のない父はだいぶ苦勞したと聞いていた。

牛は三十頭ばかりもいるだろうか。放牧場の南のルーズバーン入口付近に群がっている。全部乳牛である。黒と白の斑のある見るからにいかつい体軀を午前陽に暖めていた。放牧場は所々草地になっていて、水溜りもあった。そして東と西の端のほぼ中央の地点に水飲み場が掘ってある。こんな何の変哲もない丘を、父はどうして苦勞して造成したのかと不審に思った。又、何故小高く土盛りをする必要があったのかと、父の意図を桑沢は綿密に検討しようと思った。そして、運動場にも匹敵する広さをもつこの丘の頂上を一わたり見回した。遠くに瀟洒な松の並み木が陰をつくり、牛たちの夏の休み場になっている他は、実になだらかな起伏を見せているにすぎなかった。しかし、北のバス通りから見遣るこの丘は、都市化の進んだY市の西の外れにあって、一つの風物詩であることは、赤い屋根をつけた三塔のサイロと共に間違いなかった。

桑沢は、すぐ眼の下に広がる校舎の並びを疎ましく眺めた。北西の端から校舎を鳥瞰するのは久しぶりだと思った。

丘のすぐ東に体育館がある。そしてその南に普通教室棟と、特別教室棟が二棟ある。敷地中央部に又普通教室棟があり、前に講堂だったとかいう格技場などがつづき、その中央の並びの東の端に管理棟が直角に交差している。敷地南方には普通教室棟と、特別棟が二棟ある。これらが視界のほとんどを占め、他は鶏舎・豚舎・堆肥小屋・温室。農業器具機械庫、などという雑多な小建築物が点在している。桑沢はそういう一つ一つの建物を目で捨つてみた。重い歴史がそこに息苦しく渦まいているようだった。ふと、この学校に転勤してきてから六年の歳月が過ぎていることを思い、言い知れぬ感慨にひたつた。でも、それは苦々しく喉元でわだかまるまるで不快なものだった。新任地であった浜田市での二年間がいけなかったのだと思っても見た。教師として大きく躓いてしまった自分を桑沢は恨めしく思った。

昭和八年に建てられたとかいうたぐさんの老朽校舎はもうすっかりペンキも剥げてしまい、歴史の重圧に耐えかねていた。時に、それは、強く腕で押しまくれば、容易に鈍い音と共に潰えてしまうようにも感じられた。桑沢は校舎の並びから漂ってくる老臭を、一身

に浴びて立ちつくしていた。

改築運動は二年前に期成同盟が結成されてからすこぶる順調に進んでいると、せっかく校長が全校朝礼の時に報告していたはずだった。近い将来にこの老朽校舎も、自分の眼前から忽然と姿を消すに違いないのだ。そう思うと、やはり何かしら寂しいものもこみ上げた。

そのことについては、文芸部のスタッフといつか校内雑誌に企画したことがあった。校長にインタビュして、詳密にまとめて、「校舎改築の機運高まる」というタイトルで、改築ブループランを報告し、注目された。おおまかなものであったが、設計図も載せたので新校舎改築への生徒の関心は一段と増してきた。だいたい二つの線が出てきているようだ。一つは移転改築という方向と、もう一つは現地で改築するという方向である。スタッフは夜八時ごろまで残って、原稿を書いたり、割りつけをしたりして繁忙をきわめた。物置の薄暗い裸電球のもとで、目の色を変えてやったものだ。たしか昨年の六月の末ごろだったと思う。桑沢は女子一人交じえた編集スタッフの生徒の必死の表情を幻のように浮かべて、溜息をした。

と、向こうのルーズバーンから黒い団塊のようなものが、こちらをめがけて突進してくるのに気づいて、咄嗟に身構えていた。二頭の牛が土を蹴って鋭い刃物のような角を突き出して疾駆してくるのだ。前のは背の方はほとんど真黒で、腹のところだけが白いやつで、後の方のは整った斑のあるやつだった。桑沢は瞬時黒い牧柵のあるのを忘れていた。広い荒野で野牛の怒りに触れたかのように戦いた。逃げ場を失った羊のように縮こまって、運命のなすがままに任せるよりしかたがないと思った。桑沢は生命の危機に瀕しているという厳肅な心になった。二頭の牛は自分を角で大きく宙に飛ばし、地に叩きつけたあげく、鋭利なその爪で、めちゃくちゃに自分の体を碎くに違いない。黒い血が地に染みて、所々斑点をつけて、その上を猶も牛は駆けずり回って、やがて三十頭もの大群が、まるで原形が分からぬくらいに、私の肉片を散乱させて……。

牛はもう二十米もの手前に迫ってきていた。牛の大きい鼻づらと、見開いた黒い眸がはつきりと認められた。荒い息づかいはいもう現実のものとも思われなかった。暗い地の底から、目くらめっぽう走ってくるかのようなだった。四肢は力づよく地を蹴っている。桑沢は声にならぬ悲鳴をあげた。何故か、その時、群青の海の色が目の前に漂っているような気がした。その海の色は、しだいに無気味な青さを増し、体一面にまわりついた。そして喉をしめ上げてくるのだ。彼は何度となく悲鳴を上げ、しまいには目をつむってしまった。目の中で青い色が蜃気楼のようにたゆたいながら流れていた。

すぐ間近で、押し倒すような風圧を感じたかと思うと、ひづめの地を咬む乾いた音がした。桑沢はよろけて、目をつむったまま必死に牧柵にしがみついた。が、それきり何も起こらなかった。その代わり、手首の辺りに針で刺すような刺激を感じた。夜露で湿った電線に触れたのだ。

牛舎の入口付近には、もうたくさん牛が溢れていた。その群の方へ飛ぶように走っていく二頭の牛の尻が、淫靡な生きもののように蠢いている。二頭の牛は牧柵の手前で急激に旋回すると、群の方へ帰って行ったのだった。群に到着すると、後にいた斑の整ったやつが、黒いやつの尻に覆いかぶさった。すると黒い牛はしばらく静止していた。後ろの牛は前脚で尻をかかえこむようにして、自分の尻をゆすぶっていた。それは乳牛の雌同士が

するにしてはあまりに実感の籠もった演技だった。

桑沢は、何度も、電線に触れて見た。刺激は、指先を通り、五本の指を無感覚にさせ、手首の付近で溜っているようだ。腕全体が痺れるような強いものではない。時には何も感じない時もあった。強く触れてほんの第一関節くらいまでしか通ってこない時もあった。五本の指を丸くまとめて、青黒い銅線に触れさせる動作を幾度となくくり返しているうちに、その刺すような感じは薄れ、鈍い快感のようなまろやかなものに変わっていった。すると手首の筋肉がひどく疲労しているのが意識された。桑沢は四本の銅線に体中を縛り上げられているかのように、そこに身動きできなくなっていた。体中の生気をその電線が吸い取り始めていた。桑沢は貧血した。

——電気牧柵の考えは桑沢君の発案だそうでねえ、君。専門外のこととはいえ、よく考え抜いた案じゃないか。

いつか聞いた校長の声がどこか遠い所で反響していた。

桑沢は、格技場と農業機械室との狭間にはいり込んで、逆光を浴びた本館を見上げ、はっと息を呑んだ。昨晩の夜露で濡れて水ぶくれのようになった木造校舎の黒い輪郭は、滅びていくものの死臭すら漂わせていたのだ。それは燃え残った灰がころうじて燃焼物の原型を保っているような、危うい造型であった。それに何か非常に微かな力を与えれば、もう音もなく碎けそうだった。

狭間の日陰のビニールハウスに茶色のトンボが止まっていた。翅を休めているというよりは、もう己に死んでしまっていて、しがみつくような形のまま物体と化しているような気がした。でも薄い光に翅が七色に光った。翅だけが生きている。桑沢はそう思った。

3

人声のする職員室を桑沢はわざと回避した。そして、昇降口を上がるとそのまま左に折れ、きしむ階段を登り始めた。

歩みを咀嚼するように一歩一歩登っていった。二つの階段は床油が黒く染み、その異臭が鼻をついた。採光が悪く登り始めるや急に薄闇の中へのめずり込んでいく恐れを覚えた。何か目に見えぬものが、階上から魅きつけているように思った。

登り切ると、廊下が左方と前方に二本伸びているちょうど角の所に立った。いつもであれば、ここでこれから授業をせねばならない教室の方を確かめようとうしくなるところだが、農業祭の今日は妙に解き放たれたような、しかも、どこかでつかえるようなおさまりの悪いものをぶら下げていることを意識した。

各教室の入口付近には、それぞれ趣向をこらした飾りつけがしてあった。平生のぎくしやくした固さはまるで融け、どこかのスーパーの特売場みたいな原色の看板や案内標示が氾濫していた。今年は三年に一度の大規模形式で行なわれたので活気に満ちていた。準備にはほとんど一月要した。左側の廊下の一番手前の教室が家庭科展に、隣りが、農業科・畜産科・農業土木科などの各科の展示場にと、それぞれ化けてしまっている。そして桑沢の右手前方の廊下の教室は校内の各クラブの展示場で、種々な恰好の板が、天井から下がっている。そこから読める字を拾って見ると、手前から写真クラブ・文芸クラブ・絵画クラブ、そして少し地味な郷土研究クラブ・硬筆クラブなどという具合に連っている。確か、

この校舎の北側の棟は製造科の即売場や、園芸班の苗木や鉢ものの展示即売会場になっていたはずだと、彼は向こう側の棟を見る。しかし、そこには無気味に静まり返っている校舎が聳えているばかりだった。

内と外とでまるっきり印象が違うのに彼は当惑した。この大きな空間の中で自分の位置を危うくしていた。彼は後から自分を突き動かすものを感じながら目の前に密集している小部屋の一つ一つを探索しようと思った。そこには自分と関っている夥しい雑物が混然と詰めこまれている気がした。

桑沢は左の家庭科展の広い入口を通過して中にはいつていった。すると急に裏側から三名の女生徒が姿を現わした。彼は不意討を喰ったように足を硬直させた。

——き、きみらはここで何をしているんだ。

桑沢は、咄嗟に身づくろいをするように、顔を神経質に歪めて見せ、咎める形になった。

——先生のような人が、変な気持ちを起こさないように、こうして見張っているんです。これは私たち一年間の成果なんですもの。

三人の中の少し丸味を帯びた背の低い生徒が一步自分の方にしゃしゃり出て、小馬鹿にしたような口調で答えた。

——きみたちは、映画を見ないのか。ここで何時間もこうして監視をしているの。すると別の長い髪のが、少し羞恥を帯びた目をして、口ごもりながらいう。

——もう交替の時間なので、これから体育館へ呼びに行こうと思っています。と、さっきのが、——まだちょっと早いけどね。とまたこざかしげな口調でいう。

生徒らは今桑沢のはいつてきた入口の戸の横の所まで出ていくと、一時に含み笑いをし始めていた。顔は見えない。けれど一様に体を痙攣させたようにひきつらせ、クックツと笑っていた。そしてやがて姿が見えなくなる。階段の音が、廊下に何か転がすように響き渡った。桑沢はその音が遠のくのを確かめた。

生徒用の机を無数に並べて、その上に白い布きれや紙を貼り、展示台がしつらえてある。机の高さがちぐはぐで、所々凹凸模様がついている。その上に刺繍やビーズ編みの袋物や、レース編みなどの手芸品が展示されている。中央に仕切りを兼ねた展示壁があり、入口の方に向かって、スカートや作業服、男ものの浴衣などがピンで貼ってある。全く雑然としていて、品数は多いが統一に欠けている。少し出来のいい洋服や、着物などはトルソーに掛けてあった。桑沢は前室の模様を一わたり眺め、右回りに巡回しながら仕切りの後ろの後室にはいつていった。

いつも授業をしている時に感じる一種かび臭いものはどこにも感じる事ができなかった。むしろさっきからムンと鼻をつく異臭をがまんできなくなっていた。それは板に染みたまかの臭いではない。女の体臭だと思った。腋臭の臭いに似ている。それは展示された彼女たちの作品の方から渦になって迫ってくる。

生きものの臭いを発散させる、たくさんな作品。桑沢は前のトルソーが、首のないまま動き出しそうに思った。するとそれに合わせピンで押してあった服やエプロンがひらひら空中を舞い出す。彼女たちはいったいどういう気持ちでこれらのものを作製したのか疑った。息がせわしくなった。作品のすべてがじっとり汗ばんできているように感じた。

桑沢はベビー服のコナーで足を止めた。腋臭に似た臭いはそこから一斉につよく吹き上げているようだ。そして、それだけではない。その服の見えない顔や手や足の部分に

見覚えある肉塊が盛り上がってきたのだ。そして、中の一つが服を着た子供となって壁から離れてトコトコ危なっかしく近づいてくるのだ。

——バイバイ、バイバイ、バイバイ……。おとうちゃん。おとうちゃん。……。

桑沢は幻聴だと思った。しかし、それははっきりとした肉声のようだった。目の前の二歳くらいの子供はしきりに手を振り始めた。その温かい声と、その仕種は現実感を伴って、彼に迫ってきた。しかもほんの数時間前に全く同じことを体験してきていることに気づき、奇妙な気分になった。子供は壁にピンで止めてあった紺のツーピースをまとい、少し左右に揺れながら歩いてくる。よく見ると、スカートは少し縫い上げをしてあり、上着の袖口も内側に折り込んである。腕の関節の部分と、スカートの後ろは数本のしわが走り、あかさえ薄くついている。その服装のすべてはいつも見慣れているものに違いなかった。その子供はぜんまい仕掛けの人形のような動きをして、桑沢に近寄ってくる。でも、口では確かにバイバイを連呼している。いや、近寄ってくるのではなくて、その肢体がだんだん拡大されてくるのだと思った。そういえば口許の動きもしかと分かりかけてきたし、さびしげな表情までが具に分かってきた。——バイバイ、バイバイ……。同じことばがひっきりなしに子供の口から洩れている。

——もういいかげんにおよしなさい。ばかじゃあるまいし。

子供の母親らしい女の声もした。すると、さびしげに手を振っていた女の子は、口を閉じ、手を止めて女を見上げる。女は最前から凝っと自分たちを見ていたのだと桑沢は思う。彼はいつしか車の中にいた。彼は車の窓を少しずらせてあるすき間から、今おろしたばかりの彼等を見ている。そして咎められて手を下ろした女の子の代わりに、こんどは。自分の方が車の中から手を振る。その女はそういう二人のやりとりをじれったそうに見ている。そして子供の手を強くひっぱり出す。子供は諦めて女について歩き始める。そして時々名残り惜しそうにこちらを眺める。

目の中の淡い残像のようなものが桑沢の前に繰り広げられた。そしてその二人の姿が消えてしまった後の虚脱感さえまだ新鮮な形で後頭部にへばりついていることに気づいた。そこで桑沢は目の中に浮かんでいるその見覚えのある女と交わした昨夜のやりとりの顛末を、どこか遠い所のできごとのように辿って見る。

——どうして私達はこの家に残らなくてはならないの。ああ、いやだいやだ。

女は目に涙を滲ませて溜息をする。アイラインが所々切れていて、その切れ目から涙が頬にこぼれる。

——おい、もうおやじのことは言わないつもりじゃなかったのか。死んで仏になっている男をつかまえて、踏んづけて見たところで始まらないじゃないか。

彼は視線を女から外して、一人で怒った顔をする。

——あなたのお父さんがなくなったのは、もうずっと前のことよ。それなのに今になってもどうしてお父さんのことで苦しまなければならないの。

——隣保のやつらが悪いのさ。全く頑固なんだよ。もう代が替って、四十年前の新川の氾濫のことなど全く縁が薄くなっているのに、彼らは私達を敵視する感覚だけは根強く受け継いでいるんだよ。

——だって、ひどいじゃない。今夜の常会だって、私の分だけお茶とお茶菓子がないのよ。

——それでお前のことだ、何かひどいことでもいったんだろう。

——少しもいわなかった。だからよけいに口惜しいのよ。

女はしきりに畳の目を長い爪でひっかいている。そして時々すすり上げる。彼は若い頃の父の面影を想い浮かべる。そしてその顔の中に翳りを感じる。そして、いつものように、父を取り巻く重々しい気配に戦く。そして、いつものように、でもそれは己に終わっていることだと思う。

——しかし、普段は具体的に私達にどうこうするという訳じゃないし、私なんかそんなこともうとつくに諦めているよ。

——どうしてこんな忌まわしい廃川地の砂にへばりついて生きていなければならないの。

私はこんな家少しも未練はないわ。明日にだってひき上げられるわ。

——母や、子供もひきつれてかい。それじゃ全く夜逃げだ。

——堂々と出たらしいのよ。アパート暮らしてた方がいいのよ。狭くても今のようなんだか真綿で喉をしめつけられているような生活よりましだわ。どうしてあなたにはふんざりがつかないの、

そこでいつものように彼は口ごもる。

——ああ、いやだいやだ。出たいわ、出たいわ。私に全く関係のないことでしぼられるのはいやだわ。

——でも、君はうちに来てから四年も経つんだろう。いいにつけ悪いにつけ、いろんなものを受け継いでもらわなくちゃ困るよ。

——ああ、そう。この家の暗い違和感までもね。みんなは何十年もよく辛抱して来られたわね。

もう私がまんできなくなってるわ。

女は子供を抱き寄せて泣き出す。子供は驚いて母親の泣き顔を、目を見開いて見つめる。女はその子供の顔を包むように抱くと頬ずりを始める。

——私、ちょっと木次の実家に行かせて貰います。この子も一緒に。あなた、朝車に乗せて行っちゃうだい。

興奮を殺して女はそういう。そして、子供に回した手をほどくと、押し入れから布団を乱暴に出し、敷き始める。目に見えぬ埃が部屋中に充満するような気がし、彼は軽く口を覆う。何か得体の知れぬものが胸の辺につかえている気がする。そして廃川地に突如水が漲ってきて、徐々に自分の家を浸し、次にミシッという音と共に家中の柱が傾くような錯角を覚える。

そして今朝、新川廃川地の舗装道路を彼は車を走らせていた。道は川のほぼ中央を東西にまるで太長い動物の背骨のように伸びている。旧堤防はすっかり耕され、道からはそこが新川の土手であることは分明に分からない。しかし、その道の北側に新しく出来た国道からは、そこら一帯が死滅した河川の跡であることはよく呑みこめた。天井川特有の、ばかに高い川床が突起していて、今でも周囲の田よりも数メートル高い所に位置していたから。

彼は川床に発達した集落や町工場や葡萄園を車窓から見遣りながら、時々助手席に座っている女と子供の方の様子を窺う。女は子供を抱きすくめるように座っている。腫れ上が

った目蓋に寝不足の跡が見てとれる。がっしりと抱きかかえている腕は意志的だが、却って目はうつろで、車窓の景色の帯を見るときもなく眺めている。そしてふと独り言のように呟く。

——カズちゃん。これでお父ちゃんとも少しの間お別れね。もちろん寂しくないわね。すると、子供は、手を上げてひらひらと振り始める。バイ、バイ、バイ……、盛んに声を張り上げていう。彼は返すことばに窮している。

と、女ははじかれたように体をこわばらせ、窓外を指さす。その方向を辿っていくと、南の堤防跡の小高い所に数十の墓石が見える。女は憑かれたようにじっとそれを見送る。それが新川氾濫時の水死者の集団墓地であることは、彼が幼いころに父から聞いて知っていた。

女の子は相変わらず、時々休んでは又、手を振っている。女はその動作を制し始める。彼は急湍を小舟で遡っていくようなもどかしさを感じる。そして、アクセルを一気にふかす……。

そんな跡切れ跡切れの場面が夥しく頭をかすめて通りすぎた。しかし鈍い頭痛と共に、一切の像が急にうせ、彼は広い部屋に一人でいることに気づいた。急に身軽になったうつろな心を持った。

桑沢は見残しの展示を目で漁った。一番奥まった所に、黒い幕を背景にして、古い歌舞伎衣裳の展示コーナーがしつらえてあった。背を高くしたトルソーに、衣裳が四点懸けてある。豊かな肢体を胸元から下に包んでいる感じに、何か玄人っぽいあだなものを思わせしたが、一様に首がなく、それが哀れに見えた。奥の一点は僧兵を彷彿とさせる、鎧と墨染の衣である。手前の三点はいずれも絢爛たるもので、奥の二点が女もので、こちらの一点が男ものであった。標示板には、市内の某商家蔵とある。両側に鉢植えの菊などが置いてあり、そこら一带に、香に似た匂いが漂っているのはそのためだった。大規模の行事なのでにわかに思いついたもののようなうだった。こんな相当豪華なものなどが多数展示してあるので、当然さっきの生徒のような監視人がつくことになるし、夜間は常の警備員の外に教員が一人ついて、巡回することになる。

桑沢は少し不安になってきていた。今朝、職員朝礼が終わった時に、急に小葉田が、都合ができたので今夜の警備を代わってくれるように懇願し、桑沢は半ばなげやりな形でひきうけていたからだ。

桑沢はこの学校で宿泊するのは今夜で二回目である。前回は彼が新婚当初のころで、農業科担当の教員に、今晩話があるから農場宿泊室にこいといわれ、学校が退けてから一旦家に帰り、妻にいろいろと仕度させ出向いていくと、新婚早々で別れづらかっただろうな、などとさんざんいびられ、結局、世間話をしたり、校長の悪口を並べたてたりして、内緒でウイスキーを口にしながら話ただけで、用件らしいものは出なく、そのまま狭い部屋でザコ寝をしてしまった。

今日は宿直室で、警備員兼用務員の園田と枕を並べて寝ることになるだろうと思って見た。園田は無口な男で、この学校生え抜きの古狸のような臭いを身につけていた。父親はこの男のことを桑沢に語って聞かせていた。一時父の元で土木工事の仕事をしていたとかいう。桑沢は今までうちとけて彼と話がして見たいと、いつも魅かれるものを感じていながら、それを実行させずにいた。

桑沢はその展示場を抜け出した。そしてまた冷たく光る廊下に出た。どうあっても、今生徒たちが体育館に閉じ込められているすきに隅なく見届けねばならないという心にせき立てられて、又、左手の廊下と右手前方の廊下の掲示を見た。足は自然と各科の展示場の方を避け、右手の角の写真クラブの会場に向かっていた。

貧弱な展示だと思った。入口からして殺風景で、ただ写真クラブ力作展とあるだけだったし、暗幕を垂らしてその上から十数点の四つ切りの黒白写真が掛けてあるだけだった。

三方の面に展示してあり、ものの一分も経たないうちに消化してしまうくらいの分量である。会場の隅に他の会場と同じく、監視人用の机と椅子が忘れられたように置かれてある。ここにも二人の男生徒がついている筈だったが、その必要もないらしく姿が見えない。桑沢はその椅子を部屋の中央に移して、自分一人に与えられた展示のように一人静かに観賞し始める。

踊り子の周囲にまとわりつく霧のようなものを見た。

素材はすべて着飾った佐田郷の『念仏踊り』の男の踊り子である。彼等は写真の中では、何か身邊に際限なく生ずる霧のようなものを払いのけるといった仕種を終わりにくり返しているようだ。十数枚の写真は、目立つた動きの変化はなく、映画フィルムのコマの並びのようにも見えた。しかし桑沢にはその微かな動きにも、その踊りの中における意味を想定することができた。佐田郷は桑沢の母の実家のあるところであった。

旧暦七月十五日に行なわれるその佐田郷の『念仏踊り』は豊作を祈るものでもあり、又、雨乞いの祈禱としても行なわれる。佐田郷の神社旧記に「宝亀年中切明神事ヲ再度タテマツル、又、天徳元年大宮大念仏ヲコス」とあり、その宝亀、天徳年間には大旱魃が襲ったという。『切明神事』とは念仏踊りの正式な呼び名である。『念仏踊り』の呼称はその歌

唱の調子がまるで仏前でお念仏でも唱えているかのように「なむあみどうや」とどの合い間に挟むので、そうなったものであるらしい。

写真はその踊りの要所をスナップしたものであって一部始終を知ることとはできないが、桑沢は幼いころの記憶を手繰り寄せて、その欠落を補うことができる。

大中小の双盤が三つ、太鼓が一つ、鑾二つ、七孔の笛一つの七人を一組とする。他に大花が七つ出る。これは二段に桜の花を吹いたもので、その頂上には旗をたてる。踊り子は、すべて、頂上に五色、周囲に緑と赤の四垂を垂れた妻折の花笠を被り、浅葱地に亀甲、稲妻、四つ目模様の衣裳に青白だんだら地の三尺帯をつける。

七人の者は輪になり、また、その排列をかえて色々に踊る。

鐘を乱打して楽人を囲む。それから彼等は鐘に合わせて合唱する。「はいねんのうねんのうおい」と唱えながら二つ拍子で合唱し、踊りながら定まった図形を描きつつさらに左に回転三回。踊りは体を前後に屈曲させて横へ一歩行って半歩戻り、又一歩行って・半歩戻り、それをくり返しつつ、大圈を描いて回転してもとの位置にもどり、「はいなんもうひーいでんえーおい」と合唱するのだ。

そういう踊り子の動きや声がまのあたりにゆらめいているような気がした。「でんでこでんからか」「でんでこでんからかーなーまみどー」「でんとうでんでこでんでんていえーやしっからかっかつとんでーえーやしっからかっかつとんでーえーやしっからかっかつとんでー」

「……」頭の中で合唱の断片がこだましていた。それは写真の中の男たちの肉声のようにも受けとられた。彼等はいっしか円を描いて桑沢の前を回り出した。双盤の音色が部屋中に反響した。一定の間隔を置いて予定された音が響くのとはい違い、それは無統制な乱打のくり返しだった。その一つ一つの音響が鋭く鼓膜を刺激し、頭の芯を痺れさせ始めた。彼等はこわれた玩具のようにぎこちない踊りを桑沢の前で見せていた。口々に唱える「なあまみどう」の念仏も、定かに聞きとれぬくらいに喧噪に満ちてきた。表情は一樣にうつろで狂人のそれを思わせた。彼は列の方から限りなく大きな力で引き寄せられる心地に氣づいた。そして椅子にしがみつくような恰好になった。

列の中の黒い踊り子が、桑沢に何か盛んに話しかけようとする。口の動きをよく見つめるのだが、何をいつているのかさっぱり分からない。彼は恐る恐る椅子から腰を浮かす。そして列の方に行こうとする。するとその踊り子の方から彼に近づこうとする。彼は思わず後じさりをする。

——正俊のおっさんまた酔狂を始めたそうだぜ。得郎ちゃん、おっさんが呼びにきているぜ。

彼は聞き覚えのある声に耳を澄ました。男は母の里の隣りの叔父の顔に似てきていた。男は踊りの輪から一人外れて彼の前に立った。花笠の底の奥の顔は心なしに強張っていた。揃いの衣裳の、シンコカラゲとかいう東から風裾のとりかたが、妙な艶を感じさせた。

——なんでも、お前の名前をしつこく呼んでいるそう。おっさんも、里にきた時ぐらいははねを伸ばしたくなる気持ちは分かるんだが、どうも度が過ぎていけねえ。さあ、早くおっかさんと一緒に何とかなだめな。こんどは首に荒縄まいて死ぬ死ぬとか、たわ言いつているというぜ。さあ早く。

と男は彼を両手で、観客の人込みの中へ押し戻そうとする。そのあまりの力強さに思わずよろける。彼は無理にその踊りの場所へ引き出されていた自分を不思議とも思わなかった。

群衆は遠巻きに踊りを見ていた。彼はその列からちょっとび出した地点で、それまで長らく見物が続けていたような氣になっていた。そこでその踊りの環から目をそらして、男のいう母親なるものの姿を人込みの中に探した。そして人込みの中に見覚えのある女の顔を見つけると思わず駆け出していた。

人波を掻き分けて中へ割り込もうとすると、その女もこちらの方へ近づいてくるようすだ。女は肩で息をしながら、さまざま男や女の間をすり抜けて、時には屈強な男たちの力で押し戻されたりしながら近寄ってくる。

そういう夢のような空間の中にいて桑沢は何か大きいものに翻弄されていた。

その空間はつぎに突然一面に夕焼けの色に満たされていた。その中で、彼はさっきの中年の女に、手を引きちぎられるように引っぱられて走っていた。女は少しも彼をふり返らず、行手を見つめて小走りに急いでいた。

——おとうちゃんに、しっかりいうてくれよ。早まるな、おとうちゃん、残されたものはどうなるかって、とりすがっていうてくれよ。戸口に駆け込んだらすぐ大声張り上げていうてくれよ。

女は、しきりに同じことばを一人ごとのようにくり返している。

そこで画面は急激に闇になる。何か映し出されているようだが、真黒で見分けがつかない。しかし時が経つにつれてその闇にも濃淡があることが分かってくる。何か闇の色が雑多なものを形造っている。その奥から呻き声が湧くように起こる。人間のようない団塊からその声はしきりに洩れてくるようだ。彼は今まで押さえていた、さつき女から教わったことばを吐こうとする。しかし、何度もこみ上げてくるそのことばを呑み込んだ。そして彼は納屋のゴミの臭いにむせていた。

中の男は闇の中で体を横たえて幾度も呻いていた。しかし、しだいにその拡大された呻きも、ことばになっっていることが分かるようになった。——お、お前ら、俺を、ばかに、しやがって。よってたかって邪魔者に、しやがる。それじゃ、自分で、こうして、首を締めて、死んでやる。

闇の中の影がその時、ひどく硬直した。そして、こんどは弱い呻きに変わっていった。彼の目に、ピンと張った荒縄が、首すじから、足の方に伸びているのが分かった。男は首に縄を数回巻きつけた後、そのはじを足にかけて結び、足の力で、首を締め上げているのだ。

——得郎さん、こんどはほんとに死ぬ気だよ。光ちゃん、早う止めて。

その女をせき立てる別の女の声もある。納屋の入口は、女や男が数人集まっている。彼は、目を見開きかたずをのんで見守っているだけだった。女が教えたことばは、もうとても口には出せない。

——トク、ロウ。トクロウ。得郎を連れてきてくれ。最後に、最後に、一目だけ、見せてやってくれ。俺は、ばかなオヤジだが、あいつの、前で、平謝りに謝りたいことがある。

——さつきから、得郎に謝るんだといってきかないんだよ。何をいまさら謝るなんていつているのかしらね。

——酔狂のいうことだから、まともに受けちゃだめだよ。うちでは、だいぶ前に、私にもそんなことをいつてたわ。

——女が声を押し殺してそういった。

——素面じゃ、めんどろ見のいい、ほんとにいい先生として通っているのにねえ。可哀そうに、新川に憑かれてしまったんだよ。

すると、隣の男が、そのことばを制するようにいった。

——得郎さんの前で、川のことばももういうな。

そこで女がああ、と悲鳴をあげる。と同時に入口の数人が中の方に駆け込む。しばらく藁やら木ぎれやらがはねる音がしたかと思うと、かすれた声が納屋中に鈍く響く。藁埃が霧のように押し寄せてくる気がする。そしてその粒子の一つ一つにその男の死臭が付着していると感じる。ほんとに死ぬんではないかと思う。

彼は中の暗がりですの時どんなことが起こっているのか測りかねていた。でも、ぼんやりと、中の混乱のようすは目に見えていた。駆け入った男達が横になっている泥酔の男の両手両足を取り押さえ、首に搦みついている荒縄をほどこうとしていたし、下の組み伏せられた男は力をこめてもがいていた。時々押さえていた男の足がすり抜けて、近くにあった藁や木ぎれを勢いよく蹴とばす。すると別の男が加勢して二人して両足を押さえにかかると。そして、足に巻きつけて結んである縄を取り除こうとする。するとしだいに下の男の動きが鈍くなり出し、やがて動かなくなる。縄がすべて解かれていた。

彼はそういう出来事を傍の女とともに、凝っと見ていた。そしていつしか、その男と自分とは何か強い絆で結びつけられた、もう離れることのできない者同士に思えてくるのだった。

何故男が急に暴れだしたかは知らない。その女の実家に祭りに招待され、しこたまごちそうになって歌を唱い始めたところまで見届け、近所の子供と一緒に踊りを見にいったのだ。そういう記憶のはじはつかめたのだが、彼には全くその前後の事情が呑み込めなかった。それまでは、男は集まってきた男達と陽気に騒いでいたはずだった。あまりの変わりように彼は目を疑った。

しかし彼は頭の隅の古い記憶が今までの一部始終を詳細に空間に吹き上げているという事実に気づきはしなかった。ただ、新鮮な衝撃を伴わない怠惰な流れにも似た出来事を、儀式のように感じていただけだったかも知れない。男はなおも呻いていた。時々それはかすれて、男は疲れ果てているようだった。祭りという晴れがましさの中で、それは陰湿な生きものの声に聞こえた。そしてその声はある種の懐しさを呼びさますほど彼の心になじんできていた。

「はいなんもうひーいでんえーをい、……でんでんからか、……なーまみどー、……でんでんからかーなーまみどー……」

桑沢は又踊りの環の前に回帰していた。桑沢の前の踊り子はやはり、霧のようなものを身にまとい、いや、それを振り払う恰好で踊り狂っていた。終わりを知らぬ旋回であった。

いつしか彼等の衣裳は濡れてきていた。よく見ると、周囲の、今まで霧のように見えていたものは雨の層であることが分かった。

糠雨はやがて大粒の雨になった。桑沢の周囲は雨の騒音に満たされた。

雨は桑沢の周囲に漲った水位をふくらませてきた。そしてその中にどっぷりつかっていた。

4

土木科の展示場の入口に立った桑沢はまだ降雨の激しい雨音に耳が摩痺していた。中にはいるや、急に出雲平野の真った中に誘い出された気になった。

会場一帯が暗幕で光を遮断しており、スポットライトや、室内照明の光の帯が、箱庭様の模型の出雲平野のパノラマを浮き上がらせていた。教室の床をそのまま利用した飾りつけで、こんどの農業祭の最大の呼びものの一つであった。タイトルは「出雲平野の治水と利水展」とある。

桑沢はその平野一面に降り注ぐ雨の細い軌跡を思っていた。雨乞いの神事は普く平野に雨を呼んだのだと思った。慈雨は平野の田や畑を潤し、眼下の斐伊川はいよいよ水位を上げていく。桑沢は肌まで濡れ透ってくる冷たい雨の感触を楽しんだ。そして徐ろにそこいらの地形を改めて目でなぞった。

手前に斐伊川を挟んでなだらかな山が両側に連なり、その狭間から平野の全域を鳥瞰する趣向になっている。川を下ると急に両側に平野が展開する。平野の南と北にはやや高い山脈が東西に走っている。川は平野の中央部で大きく彎曲し、東の湖水につき刺さる。湖水に至るまでの田の中には築地松に囲まれた民家が点々と旨くばらまかれていて、変化を

つけている。川には五つの大きな橋梁や鉄橋が渡してあり、それがそれぞれ平野の交通の要路をつないでいる。斐伊川からわかれ出た数本の排水幹線や、用水幹線までも正確に模してあった。そしてそれぞれに白い札で名称が小さく記してある。こちらから見ると、室内の照明が行き届かぬ所もあって、いちいちその名称を確かめることは不可能だった。

手の込んだ模型は土木教員の心血を注いだ指導の証しだった。桑沢は今までもこういう展示を一度経験してきていた。その充実している点から見ると、他科の追隨を計さぬ。山の緑色に擬す苔の置き方ひとつを例にとっても、ふくらみやしまりの具合がまことに技術のほどを思わせ、それらが歴史の厚味となって観覧者の心を打つ。土木科展に佇んで暫く我しらず圧せられて、目を据えて見入る観覧者の実に多かったことか。桑沢が、出雲平野の中に誘い出されたような気になり得たのはその迫りくるリアリティーからであった。でも特に今年の展示は群を抜いていると桑沢は思った。

——恐らく、皆さんが精魂傾けて作製準備した農業祭も、本校舎で行なうのは今回が最後になるものと思います。そういう意味で皆さんは永くこの催しを記憶にとどめるでありましょう。ひとつこの祭りの展示を隅々まで眺め渡していただきたい。そこには皆さんの日ごろの学習の成果が結実していることでしょう……。

そう熱っぽく開会式でしゃべった校長のことばを桑沢はふと思い出していた。そしてその展示物の平野を散策する心で歩き始めた。

歩き始めると、やはり雨の音は、やや弱まってきたものの耳鳴りのように響いている。

桑沢は豆粒のような民家やビルの模型に、ひとつひとつ豆電球が封じ込められているのに気づいて驚いた。鋭い光のスポットライトの明るさの中でそれに気がつく人は稀だろうと思い、その心配りの細やかさにほのぼのとするものを感じた。でも、スポットの帯を外れた地点では、特にそれがビルなどの大きな建物になると、それでも橙色に窓を塗りこめたように光が洩れているのが分かった。

川はそれらの集落の間を冷たくうねって下っていた。土手は、しかし、まるで脆弱に見えた。平野の広さや山の高さに比して川幅はだいぶ誇張されていて、その作品のテーマを観るものに強調しているのだが、全くその土手は細かった。それは豪雨を御していけないように思えた。でも、桑沢の頭の中の雨は依然として弱まりを見せない。雨は平野中を淡くぼかすほど強く降り出していた。それが中央の斐伊川に徐々に集まり、見る見る水嵩を増していくようである。

土手と流水量は危うい均衡を保っていた。もう上手の鉄橋すれすれの高さを激しく帯のように流れていた。桑沢は不安になった。快いと思っていた雨が、今は恐怖の兆しになりつつあった。夥しい流水は今にも土手を溢れそうになっていた。水の莫大な力はひとたまりもなく軌道を乱しそうに思えた。そうすれば兩岸の集落は瞬時に水没してしまうのだ。

桑沢は斐伊川の水系のすべてへ目を配った。大小数本の川が岐れ、あるいは西方へ、あるいは東方へと走っている。が、いずれも本流の流水量を吸収しうるような規模のものではない。桑沢は戦きながら、水系を確かめたり、視線を下流から上流に移動させたりして見た。そして、右岸、——川を挟む二つの山の片方、仏教山の裾野の平野に焦点を合わせた。

そしてそこら辺りの右岸の堤防をくまなく検索した。ない。やはりない。斐伊川の支流旧新川の分流点は固く泥の堤の盛り上がりが認められるだけだった。

死滅した河川。——桑沢はそう呟いた。

旧新川廃川地は、稜線の果てる地点から本流とほぼ直角に岐れ、東方へ一直線に延びていた。それが廃川地であることは、両側に連なる田や畑の高さから一きわ突出していることからよく分かった。わざとそこに土盛りしたような感じである。そして帯のように横たわっていた。それは桑沢の眼の前で荒れ狂う激流を、冷く拒絶していた。

新川。桑沢は何度も廃川地の模型を確かめて飽きなかった。氾濫を呼ぶかも分からぬ本流から目を離し、新川の分流点、中流、河口と、その跡を探した。

大派流新川は旧四か村を通過して湖に注いでいた。新川の開削は天保三年に竣工し、ほぼ百年の後、昭和十四年には廃川となった。その間、実に数奇な運命を担って命脈を保ち続けてきた。

本流が流す土砂は日増しに川床を上げ、河口に大きな三角州を造った。湖は漸次東に退き狭められた。当初の藩の目的の一つだった新田を造成するという意図は達成しそうに思えた。しかし雨期を迎えると両岸の住民は日夜脅えつづけた。いつ半鐘が鳴り響くか知れぬといった日々を重苦しく生きねばならなかった。天保二年二月に出された新川開削令第一条に「斐伊川筋追々高く相成云々此度出雲郡出西村より下莊原村に『新川』一筋御普請被仰付候以後は水難も有之間敷候間百姓共可令安堵事」とある本流を救う本命は一応果たされたが、それがため、又大きな治水問題を惹起せしめた。昭和の初め、新川存置をする説と新川廃川の説とに地元は大きく二つに論が分かれた。

その対立のまま昭和九年の九月豪雨を迎えることになる。

その時の県下の被害は、県の報告によると、「橋梁流失破損一七〇、堤防決潰毀損五一三、道路崩壊九八二、鉄道線路故障一六、山崩一六六、家屋倒壊三九、同流失三、同浸水五一三二、死傷者一六、田畑浸水七二八町歩で、被害見込総額は一〇〇〇万円に達した」とある。しかし、被害は新川流域の莊原村地方が最も甚大であったといわれる。

九月十九日午後から降り始めた雨は二十日夜になると天の底が抜けたかのように激しくなり出し、雨量は三百六十ミリにも及んだ。二十一日早朝から斐伊川水系ではあちこちで堤防が決壊し、殊に上流の地域では数百メートルにわたって三重の堤防が切断され、この地点から本流の洪水量の七十%が新川口に押し寄せた。こうして、午前八時ごろから新川の各所で堤防が決壊の危険を生じた。

午前十一時直江村の通称「法華経堤防」が切れた。濁水は直江村南部をかすめ、国鉄の築堤で一時せき止められたが、その猛威はこれをひとたまりもなく破り切って、一直線に莊原村へ魔の手をさしのべた。その時のようすを莊原村長の公式報告書では次のように述べている。

「午前一一時三〇分頃、直江村地内法華経堤決壊シタル旨急報アリタルヲ以テ警鐘ヲ乱打シ村民ニ周知セシムルト共ニ避難ノ警告ヲナス。午前一二時、今市町警察署員一〇数名来援スル頃新川ノ濁流ハ急激ニ流レヲ止メ、全水悉ク莊原村地内ニ奔流シ、鉄道ヲ破壊シ、家屋橋梁ノ流失スルモノ電柱ノ倒レルモノ等一瞬ニシテ水魔ノ荒レ狂フヲ如何ニスベクモ非ザルノ状態ナリ。……」

罹災者の状況についての報告は次のようになされている。

「二一日夜ニ至リ避難シタル村民ハ近村ノ親類又ハ山手方面ノ民家ニ收容シ配給班ヨリ絶エズ食糧、薪炭等ヲ配給セリ。二三日朝ニ至リ梢退水シ、東部、南部地域ノ浸水家屋ハ

漸次床上ヲ表スニ至リタルヲ以テ床上ニ沈殿シタル汚物ノ掃除家財家具ノ洗滌等逐次整理ノ為メ帰宅セルモ、南西方面ニ於テハ尚床上数尺ノ状態ナリシガ、二七日頃ヨリ漸次退水シタルヲ以テ取片付ノ為メ逐次帰宅ヲ為シ、屋内掃除ノ出来次第帰宅スル者アリト雖モ、食料ノ自給ハ不能ニシテ握飯、副食物、水等ソレゾレ配給班ノ活動ヲ必要トセリ。・・・

その後、各種の伝染病が襲ったことはいうまでもない。数十名のパラチフス、赤痢、腸チフス、疫痢の患者を出し仮設隔離病舎を一棟新築したほどだったという。

桑沢は幾度もなめ回すような視線を廃川地の模型に這わせた。旧川床に並べ置かれた豆粒の民家や工場の中の電球の明りが一際鋭く光った。今にも電球がはじけそうな強さだった。そのことごとくの光茫が桑沢の目を射た。突然に失明したかのように眼の前がぼやけてきた。桑沢はその箱型の模型パノラマの縁に手をかけ体を支えた。そして新川決壊にまつわる種々な知識を頭の中に蘇らせた。すると、やはりその妄念の渦中にくっきりとあの文芸部の部室の中で見つけた写真の中の正俊の姿が浮かび上がってくるのだ。それも全く顔色の退せた死人のような顔が。

桑沢は昭和の十八年生まれだから勿論その洪水の体験はない。しかし、成長するにつれ、色々な人間から、色々な話が耳にはいつてきた。そして当時土木技手をしていた正俊が「法華経堤防」決壊の遠因を造ったのだというおぼろげな結論を、正俊の死ぬ数年前に心の中に確立して、それに脅えていたのだ。しかしそれも確たる証拠があつてそういう風に入々がいいはやすのではないと思いたかった。いつしかそういう雰囲気醸成されたに相違ない。そう思いたかった。変屈な正俊は何かにつけて人の誤解を招きやすかった。

桑沢は浮かび上がってくる顔を何度も無理に押し戻そうと思った。でも、地の底から湧き上がるようにいつしかその顔は形造られていた。そしてそれが、たくさん溺死者の喘ぐ顔に変形した。そして泥水の中を渾身の力をふりしぼってまがいていた。

新川の被害は新川存置論と、新川廃川論の両論を霧消させてしまった。

自然の厳しい現実を見せつけられた国や県の関係当局は、新川の川口閉鎖工事を急いだ。工事は十三年十二月から始められ、翌十四年十一月県告示は廃川を宣言した。

桑沢は新川を平野の中に象眼せられたもののように見故し始めていた。

己に死滅はしているが、そこに渦巻く死者の霊の燐光を思った。川床一帯から湧き出るようにゆらゆらと青白い炎が立ち昇っていた。それは川に生命を吸い取られた者達の魂の遊離の様かも知れなかったし、川の開削に従事した人夫達の恨みの心が炎となって燃え出たかも知れない。桑沢は目の疲労に気づき数度瞬きした。暗がりの豆電球の光のせいかも知れないと思っても見た。しかしそれとも違う青白い光はやはり地を這って漂っていた。桑沢は腰をかがめてそのパノラマの縁に両手を触れた。それから、その部分に力を入れ握りしめた。と、自分の上体は新川の川口辺まですっぽりと覆い、平野の中ほどまでも影を落としていた。すると全身に急に熱いものが走るのが分かった。それは漲る力のようなものだ。パノラマを自分一人で抱えたようなものだった。出雲平野が自分の腕の中で広がっていた。平野の底に秘められた力を自分の力とすることができたように思った。自分だけの平野だと実感した。

しかし、やはり青白い炎は桑沢のすぐ下でも燃え立っていた。

どこからか人声がしてきた。その声はさっきの部屋で聞いたあの小人数のものではなく、

数千、いや数万の人間の眩きに似た声だと思った。しかも同じことばのくり返しの様な気もする。ひと言も洩らすまいと彼は耳を傾けた。哀切な声はやがて部屋中に広がった。その時あの燐光は部屋を青色に染めあげるかのように燃え上がった。

「ハー、山々大山クズシ、ハヤレショイ、山ヲクズイテ川ニシヨウヤ……」
・山ヲクズイテ川ニシヨウヤ……」
その歌は新川開削の最大の難所であったといわれる、中流に位置する山を切り貫く時に、時の家老が人夫を励まし、勇を鼓舞するために作ったといわれる。そしてそれは、現在土地の盆踊り歌となって歌いつがれている。毎年盆になると浴衣姿の男衆が円陣を組んで踊る。桑沢はその歌の中に潜む哀情は認めたが、むしろその場の雰囲気からして華やいだものをより強く感じてはいた。しかしこの歌は新川開削の人夫の労働歌であり、そこに切迫した感情の吐露、もしくは半ばやるせなさも籠もっていたに違いない。

桑沢は開削の工事に携わる人夫達の歌声をその部屋で聞いた。そして彼等の姿も認めることができた。巨大な山に取り組む人夫達の手中にある道具といえば、鍬や竹籠など、まことにおぼつかないものばかりであった。全くの無力といった状態で各々山に取り組んでいるのだ。しかも獲ものに群がる蟻のような莫大な数の人夫の群を認めることができた。青い光を浴びながら桑沢はやはり川を見下ろしていた。同じように、山に挑む彼等も全身青白い光に濡れながらひしめいているようであった。口々に歌を口遊みながら。

桑沢は漲る本川斐伊川に目を移さねばならなかった。以前にも増す水位をたたえながらやはり蟠龍のように横たわっていた。水は濁れるだけ濁り、なめらかな艶さえ帯びて光っているようであった。それから又新川に視線を移した。やはり人夫達はそのことをひとつも知らないかのように歌いながら労働を続けている。

が、脆弱な中流の土手の一か所にひび割れが走ったかと思うと、水しぶきを上げ始めていた。それからその亀裂が見る間に深くなり、そこら一帯の堤がぐらついてきた。と、どっと土の団塊が四方に飛び散った。欠損した堤のか所から、濁った水が滝のようにほとばしった。堤防下の民家が先ずその瀑布の舌の先に巻かれ、木の葉のように激流に乗って流された。そして流れは刈田の上を覆い隠したかと思うと、白く輝きながら築地松に囲まれた数十の藁葺きの農家に襲いかかろうとして突き進んでいく。堤防の欠損か所は見る見る広がっていくようであった。本川の流水は漸次減少し、堤防の半分位の位置にまで下がっていた。激流はそこいらの民家や工場や集会所を嘗めつくし、通過地点一帯は濁った湖を思わせ、今までそこに何があったか見当さえもつかない。

桑沢はついに来たるべき時が来たと思った。そして失神しそうに気が遠くなりかけていた。でも、その時おぞましい想念に憑かれていた自分をはっきり意識することができた。それは下腹辺りから胸の位置につき上げてくる熱い得体の知れぬ幻情であった。

氾濫の鋒先は、気がつくとも、新川中流の開削地点に向けられていた。人夫達は気づかずに作業の手を休めない。列を崩さず、武士の統制の下に秩序正しく土を掘り起こしていた。口々に洩る歌声は妖しいまでに明確に、立ちすくんでいる桑沢の耳に達した。

濁った舌は、新川を断ち切って出雲平野の中央部を侵そうとしているようすだ。迫ってくる濁流にまだ人夫達は気づかない。彼等と濁流の間隔が見る間に縮まっていく。歌声に血生臭いにおいがした。——桑沢はたまらず両手で目を被った。

闇の世界がそうして又桑沢に訪れた。

闇は体育館のそれと違い、奥行きのあるものではなかったが、しかし少し隔ったところにきちんとスクリーンが張られてあった。そしてその中の像は、まるでモザイク模様のようで、四つか五つの独自の画面がそれぞれバラバラに映し出され、種々な像がひしめいていた。桑沢はその目ま狂しい画面の一つ一つが奇妙な脈絡を保っていることを不思議に思った。

右下の隅の画面には、桑沢の幼い頃の姿が浮かんでいた。廃川地の砂の中に建てられたバラック建てのような家。その傍に己に用をなさない古い堤防がある。小さい男の子は一人で玄關の脇の砂山に何やら絵を描いているようす。すると家の中から少し大きい男の子が出てくる。この男の手は己に病気で死んだ兄のような顔をしている。二人になるとその男の子ははずんで、又大きな絵を描き始める。そういう画面だった。その上には、筋骨の逞しいたくさんな男達が重労働をしている画面が、緩慢な流れで展開していた。男達の背後にはまだ形を成しきらぬ新川のぼやけた直線が連っていた。それから左上の暗がりの区画には、首に縄を巻いた男がのたうち回っていたし、その下の区画には、昨晩から今朝にかけての桑沢と妻のやり取りが、急速なテンポでくり返し映し出されている。女の子はまだ盛んに手を振りつつづけている。それは苦笑したくなるような無邪気な仕種だった。

しかし、さっきからスクリーンの中央で蠢いているものがあった。それは周囲の小間切れの画面を時に押し潰しそうに脹んだり縮んだりしていた。濁流の舌だった。

5

目を開けた桑沢は、パノラマが全く元のままであるのが奇異に思えた。新鮮といえるほど生気を帯びて広がっていた。

斐伊川のうねりも、新川廃川地の直線も生々としていた。山々の線もしつとりと湿りを持って盛り上がっている。桑沢は少々体の位置を変えて見た。新川に近寄るためである。

桑沢はそして時計をふと確かめた。十一時十分前を針は示していた。やや焦りを禁じ得なかった。

そこで桑沢は又新川の川床を目でなぞった。彼の家の位置を確認したかったからである。新川に被さるように腰をかがめた。中流の南岸沿いに目を走らすと、パノラマのその部分は全くといっていいほどあいまいに造られているのが、分かった。旧堤防の土手はほぼ実形通りに模してあるのだが、厚紙を切って造った人家や工場の密集地帯の配置が現実と大きく違っていたのだ。だから桑沢は戸惑った。自分の家の位置を見つけることができないと思った。むしろ製作者の意図を憎くさえ思った。厚紙の人家はそこに単に散らばっているという感じで、製作者は大きくそこで手を抜いてしまっている。完成を急ぐあまり、細かい点は抹殺してしまったものか。もうこうなれば伝統の継承も仕上げの段階で崩壊している。桑沢は口惜しく思った。もとより一教師の指導のもとに数十人の未熟な高校生が動くことであるから、そこに意思の統一を欠くのも当然のことではある。でも自分の家までも黙殺されてしまったことは否定すべくもない事実で、やはり桑沢は寂しさをつのらせていた。

そこで桑沢は周囲の地形からしてここだと覚しき地所を定めて、その一点に目を据えた。

桑沢はその位置を定めるのに、周辺の山の形や、川の川口からの距離などに基づいたのは勿論だが、旧「法華経堤防」の位置を定めて、それから見当づけて徐々に下に下って行ったその目測の仕方が、もうこのパノラマの部屋にはいる前から定まっていたことを、不思議とも思わないでいた。自分の家と旧「法華経堤防」をつなげて、そこから新川廃川地を考えるとという思考形式は己にぬぐい去ることはできなかった。

前のめりの姿勢になっているときさまざまな臭いが平野から吹きあげているのがよく分かった。それは山や川の素材である大鋸屑や、それを固める糊の臭いかも知れなかった。また苔の埃臭い臭いかも知れなかった。そういう臭いの強い空気の層の中に浸っている自分が、何か獣的なうづきに突き動かされていることに気づいた。

彼はその姿勢のまま自分の住んでいる家の地所を射るように見つめた。すると、ふつふつと何か煮えたぎってきた。むせ返る異臭の中に文芸部室で見つけた写真の中の父の顔が、放心したようなぼやけた顔のままで又立ち現われてきた。不思議と彼が小さい頃の中年の父の顔は浮かんでこなく、もうそれは実在感をなくしていた。平生この校舎の中の至る所に父の影は立ち現われてくる気がしたが、毎年秋の農業祭になると色濃くその影が形造られてきた。彼はその影に脅えたり、又心から懐しい気持ちになったりもし、その影の父に語りかけていた。

正俊は三十歳前後の若さで島根県の土木技手としての任務を果たしてきた。そして専ら河川改修や農業用水路の整備に敏腕を発揮していたという。だから川と彼のつながりは生来のものといってよい。彼が手がけた河川は出雲地方でも両の指に余りがある。この学校に招へいされてからも一時は短期間だったが、非常勤の講師という名目にしてもらって、その方面の現場での指導に当たっていた。もとより若い頃なので仕事の総指揮を執るという訳ではなかったが、実質上現場のすべての面での仕事を任されていた。風貌からすると、己に中年の男に思わせるのも、そういう仕事の面の厳しさが顔にそなわるからだろうか。人夫達からは「川がかり」などと呼ばれる程に親しまれていたという。実に出雲平野と闊った男の中の一典型といえる。その点では桑沢も、そういう父を持つ自負は感じていた。と同時にそういう父の血の流れを受け継ぐ自分の宿命を感じていた。

父親は桑沢をどうしても土木関係の高校に入れたかったらしく、桑沢は死ぬ前の年にととうとうその約束までさせられていた。しかし、もともと向いていないと嫌悪を感じていた桑沢は快からず思っていた。ところへ父の死が訪れた。父の遺命に背いて桑沢は普通高校を受験した。父親は死んだ長男の代わりに二男の桑沢が自分の志を継いでくれたものと思いい、安らかな死に方をした。病名は肝硬変症だった。

大学に進んだ頃の桑沢は常に父の影につきまとわれていた。父にすまぬことをしたという心で一杯だった。この学校に転勤が決定した時など、因縁の恐ろしさをつくづくと思いい、最初の一年間は学校がうっとうしかった。

同時に桑沢は地元の莊原での家のおかれている位置がしだいに分かりかけてきて、二重にも三重にも苦しみ抜いていた。家での父の影と、学校での父の影は桑沢を一時的に無気力にさせた。母から聞く父の人生の仔細な暗さはもう抜きがたく染みていると思った。

昭和九年の「法華経堤防」の決壊は正俊の技術者としての運命を奪ってしまったし、地元における家の信頼を流し去ってしまった。

桑沢は父の顔に語りかけた。

——でも、堤防の決壊と、あなたとは何のつながりがあるというの。噂さ通り遠因をあなたがつくったというの。

この点については母とてその真実を語ってもくれないし、あるいは知っていないかも知れない。それともう一つ知りたいことがあった。

——それから、どうして、そういう、忌まわしい「法華経堤防」の近く、しかも新川廃川地に移転してきたの。どうして、その土地から逃れなかったの。

これとて母としても明確な答えを出してくれたことはない。ただ数年前、こういうことばを洩らしたことがあった。

——おとうさんは廃川地の開拓者になろうと思ったんじゃないかしら。高校の教師をしてりゃ、そんなにぜいたくしなかったらほそぼそとやっていったのにねえ。家が流され、家財道具一つもない状態では、もう気持ちが動転してしまっ、何が何だか分からなかったんだよきつと。事実一文なしが家を建てるからには人様の懐を当てにしないでならならいのは分かるでしょう。新川の開拓者として願ひ出れば土地は安く貰えたし、おまけに国から補助金はでるしでつごうがよかったことは間違いないわ。ほんとにそういう決心があったかどうか分からないけど、氾濫後数年間は一週に一、二日くらいしか学校に出なかったようだわ。

桑沢は開拓民として父の転身を信じたくなかった。廃川地に定着したについては、何かもっと大きな訳があるように思えた。

桑沢は父の顔にそういう問いをくり返し発して、その答えを待った。しかし口は開かず、蠟面のような顔には表情の動きさえも認めることはできなかった。

彼は上体を起こした。

と同時に、父の顔を映しだしていた空間も不意に消滅してしまった。

改めて出雲平野を眺めた。

と、又、一人でこの平野に迷い込んだような当初の感覚が甦り、今日一日は全く自由な身なのだという思いが熱く駆け巡った。そして、今夜用務員の園田と共に一夜を明かす好機を何か大切なもののように思った。園田なら、父のことに関する限り、隠しだてなく話してくれるに違いないと思った。

室内の展示物が急に自分から遠ざかっていく気がした。今までまとわりついて離れなかった出雲平野のパノラマまでが変に白々しく見え出した。

彼は次に堤防に関する展示を見たが、学問として、研究の成果としてしか受け取らぬようにしていた。

模造紙に「水制」と大書されていた。このコーナーは種々の水制（流水を積極的に制御するため、河岸からある角度で河川の中心に向かって突き出した工作物）の模型が実物の二十分の一くらいの大きさで並べられている。どれも基本型は三角錘か三角柱を横に倒したような枠組で、その中に等間隔に補強の枠が取りつけてある。「いのこ」と呼ばれる簡単なものから「おい牛」「川倉」「ひじり牛」と並び、やや複雑なものとして、「尺木牛」「たな牛」「鳥足」という奇妙な名前のももあり、その流れの中での役割が説明してあった。

そのコーナーの右のはじめに「出雲結い」と「新出雲結い」の二つの水制が並べておかれ、「新出雲結い」の前には白い厚紙で注釈が施され、この水制は「故桑沢正俊先生の考案に

なるものです」と青マジックで記されてあった。

「出雲結い」はこの出雲平野の風土が産んだ、古くから行なわれている水制である。桑沢は角度を色々に変えてそれを観察した。その他の水制がすべて立体的であるのに、この水制と「新出雲結い」は平面的なのが特色のようだった。主要部は背の高い二等辺三角形で、その底辺の横木の上、ほぼ中央の辺に又横木が組まれ、その二本の平行な横木の間に十本弱の縦木があたかも牧柵のように絡ませてあった。そういう主要部を支える長い支え木が頂点に結びつけてある。そしてそれが川の流れに負けないように頂点に砂俵を一俵とりつける。流砂量の多い斐伊川を中心とする水系にはうってつけのもので、流勢を弱めて土砂の沈澱を促し、河床、河岸の洗掘を防ぎ、流れを河川の中心部に追いやって、堤防の護岸をはかる上で好都合のものである。

桑沢は「新出雲結い」を「出雲結い」と比較しながら見つめた。正俊はどこに着目したのだろうか、と思いながら見つめた。そして、正俊は「出雲結い」を補強し、流砂の沈澱力を強化するという点から改良の手を加えたものであるらしいことが分かってきた。「出雲結い」の底辺の部分に重りの砂俵を二つとりつけ、本体下部を格子のように縦横の棒木を交錯させ、それからくる流水の抵抗力の増加を、支え木を二本にすることによって吸収させようと考案したもののようだった。工作に手間どる嫌いはあるが、万全に近い水制だと思った。正俊はこの水制を昭和九年の「法華経堤防」の決壊時以前には已に完成させていて、当局の使用認可もとつけていたという。桑沢はそのことについてはごく最近土木科の教員から聞き知っていた。土木科教員の小部屋で雑談している時にふいにそういう話が出た。田部という教員が正俊のことを、古い資料を持ち出して称揚し始めたのだ。どこかの部屋に行っても、長じりをする、どうしても父の話になりがちだった。その度にこの学校を出たいという気持ちが湧いてきて、苦々しいものを感じていた。

その時々その気持が又戻ってきそうで、桑沢は「新出雲結い」が囚人をからみつけるもつれた金鎖のように思えてきてならなかった。正俊の性格を測りかねた。川に執着する男の執念はどこから発するのだろうかと思った。性格の二面性をどう解釈したものだろうかと思った。

隣りは「水防工法」のコーナーと銘打たれている。

握り拳大の砂俵が模型の土手の上や脇にたくさん積み込まれているのが真先に目についた。その中に、じかごもあるらしかった。

昭和二十四年に「水防法」が公布されるまでは、市町村が別個に水害防止組合を設立して、いざという時に備えていたという。昭和九年の新川の氾濫の時には人員の調達にやや遅れをとったのも、この組織のしっかりしていない水防体制のためだったともいう。その上、豪雨時の警防体制も整備されていなかった。正俊は已に学校の教員として奉職している身だったから、こういう氾濫時の諸問題に関して地域から疎外されることはないだろう。とすれば、災害復旧の任に一時的に復した時の仕事振りから発展したものか、あるいは噂通り新川護岸工事に当たっていた現役時代のことが原因かも分からなかった。

桑沢は水防工法の模型を見ていて、又、得体の知れぬものが吹き上げてきて、混乱しそうに危うくなっていた。さっきまでの幻影が生々しく生き返ってきそうに思った。桑沢は自ずと目を伏せた。もうこれ以上見たくないと思った。ひどすぎと思った。父の顔が一層青ざめてちらついてき出した。そしてそれらの展示はそれをずたずたに割いて濁流に流

し込んでしまいそうに思えた。——すると突然父の顔は、青白い光の中でもがいているさっきのスクリーンの中の女の顔に変わった。桑沢は頭を激しく左右に振った。

6

桑沢は、その科展の出口の所で敷居のレールにつまづいた。そして体がたわいなく前のめりになった。首だけ廊下に出した恰好で、外の光を暗い穴倉から出た時のようにまぶしく浴びた。

廊下に出る時、まるでぬんめりした液体の中から這い出たような感じがした。急に外の空気が稀薄になったような感触を覚えた。そして桑沢はこれから辿ろうとする自分のコースを見失いそうになった。これから彼は今まで飛ばした農業科展、畜産科展を見なければならなかったし、絵画クラブ、文芸クラブなどのサークルの展示も興味があったはずだった。それから階下の廊下伝いに北に出て、北側新校舎の展示即売会場で、今夜食べるベーコンやハムを買い、明日妻の里に寄るための手みやげにする、シクラメンやゴムの木の鉢植えを買い込む予定を暗に立てていたはずだ。

桑沢は外を見た。この南北に延びた廊下にも少し日が射し始めていた。桑沢はそのことから時間の経過を思った。よく飽きもせず部屋に閉じ籠もっていたものだと思った。

窓外の西方の眺望は、東西に延びた二列の老朽校舎によって左右が区画されている。従って目覆いをせられた馬車ウマ様の視野しかない。下の中庭には四角い池が一つある。その水面が鱗の輝きを見せている。中央を背の低い渡り廊下の屋根が這う。その廊下は根元の所で左に岐れ南側の校舎に刺さる。

さっき狭間から見上げた校舎の中に自分はいる。外から眺めた印象と内の感覚と根本的に違っていた。内側の小部屋や廊下の板や柱は実に艶やかで生気に満ちていた。いやそれは内からその命が突き上げて潰えようとする外形を支えているからかも知れない。

生徒達のぬくもりがまだ濺んでいそうなステレオコンサートの催し場へはいっていった桑沢はふとここが階上なのか階下なのか分からなくなった。部屋は薄闇でも、木製の椅子をすみずみまで認めることができたから、確かに別のこの部屋にはいったことは間違いない。でも、それを弁別する感覚をなくしていた。桑沢は腰かけて暫くようすを見ようと思った。

目が慣れるに従い、中央の段の上にステレオの本体が置かれていて、左右にアンプが等間隔で置かれてあることや、レコードのジャケットが壁面一杯に貼られてあることが区別できるようになった。それに、ガムやチョコレートを食べ散らした紙屑があちこちに散らばっていることが分かった。でもここが階上だか階下だか不分明だった。桑沢はそのことが何か自分にとって重大な問題のように思えてきた。立って外に出て見ればそれも瞬時に解決してしまう。でも、その勇気が出ない。一旦座ってしまうと、全身の力を吸い取られたように疲労を感じた。それは密閉された小暗室の中にひそむ暖気のせいかもしれない。

桑沢は襲いかかる眠気と戦った。

眠りほうけているところを体育館から吐き出されてくるたくさんな生徒達に、いやそれ以上に午後に又やってくる一般の客に見つけられるのはいやだ。でも力強いものに押し流されそうになった。出所不明の疲れが一時に激しく蔓延する。

昨夜の想念が頭をかすめた。彼はこれからどうしていったらいいか深更まで考えていたのだ。妻と娘と、そして母と……、そして自分と、あくまで成り行きに任せてやってくか。父の死んでしまった今、その道も可能に思えた。……それまで妻は耐えられないのだろうか。何も村八分にされた訳ではない。父のことなどいつか忘れてしまいうに違いない。——そんなことを考えていた。

その時の疲れが今一時に頭を上げたのかも分らないと考えた。そして、里にいる妻のことを思った。

いつしか桑沢はまどろんでいたが、しつこくカサカサと何かものの擦れ合う音に目を開けた。そして又、薄闇の臭いを嗅いだ。

彼は音のする方に近寄っていった。そして暗幕の裾を摘んでめくり上げた。外光が彼の目を射た。その音はポプラの枯れ枝の擦れ合う音だった。ポプラの並み木は正門の前の道沿いに一列に植えられてある。幹の太さは不揃いだ荒々しさを感じさせる木だった。彼は二階にいることに気づいた。そうすると、位置関係から各科の展示の外れの小室にいることになる。

彼は正面を見渡した。

正面の土地は一面の桑畑になっている。今はもう葉はほとんどつけていない古株が、無数に連っていた。そこには通勤途上見慣れた桑畑があるだけだったが、桑沢はある変化を見つけることができた。畑の東端のところから一直線に西に向けて、一定の幅をもった黒い土が露出していた。

その地所は桑の株がすべてひき抜かれていて、一条の新道が形造られそうな気配だった。

道はこのまま進めば正門の前に達する。でもその地点に達すれば、校舎が前進を遮る。彼はその意図を案じた。でも確実に正門に向けて道は伸びていくに違いない。黒土の道はやがてアスファルトの道に早変わりする。でもそこに立ち入った車や人は戸惑うに違いない。どんづまりに直角に交差する正門前の細道があるだけだから。出雲市の都市化計画のことを思い出すまでもなく、その新道は校舎の立ちのきを迫っているように思えた。

二階の窓からその新道の完成された姿を想像してみた。老いさらばえた校舎は新道の力に抗していけないと思った。

と、どこからか地響きのような重い騒音が部屋に忍び入ってきた。その音は小さな音の集合体らしく、しだいに校舎の階下に充満していく。

桑沢は暗幕を締めた。映画会が終わったのだ。数分後にはこの学校中が生徒で充満する。そう思い、一人だけの世界を奪われそうになっている自分を思った。

7

酔いで視野が不安定になるほどだった。

最初の巡回は桑沢で、九時に宿直室を出た。用務員の園田は午前二時に巡回することになっていて。酒は二人して七・八合くらいだったが、殊に桑沢は疲労も手伝ってかひどく酔った。そしてぶっ倒れるようになって寝た。気がつくと毛布が二枚被せてあった。手探りで時計を探し、見ると九時を指していた。酔いつぶれていても義務観念が旺盛なのに自分ながら驚いた。園田はきちんと布団にくるまって寝ている。そしてその側にも自分の敷

かれていた。

ほんの数時間の眠りは彼から完全に酔いを消していない。頭がガンガン鳴った。おまけに悪寒がする。晩秋の冷気が体のすみずみまでにひそんできて、ひき始めの風邪のような感じでもあった。桑沢は殊更肩に力がいっているのが分かった。肩や首筋の辺がひどく凝っているのだ。

懷中電燈に照らし出された夜の一区画は昼の校舎の生々しさを感ぜさせない。それは酔っているためかも知れない。でも、小葉田から請けた仕事の最中、飲んでいた自分を恥じる心もあったし、昼一人で覗いて見た本館二階の各科展の展示場を避ける心は、心のどこかにくすぶっていた。懷中電燈の光の中の切り取られたような像は、それぞれ孤立した象形にすぎなかった。

桑沢と小葉田はそんなに親密な間柄でもない。今日など平常だったら何も進んで警備のための宿泊を買って出ることなどなかったのだ。今になってやや後悔の気持ちもしてきていた。こうして足をふらつかせながら、眠気をこらえて校内巡視をすることは、たとえ園田と得がたい話をするようになってきたにせよ、怠慢な心が先に立つ。

彼が小葉田と話をするようになったのは、教頭との一件があつてからであつた。老教頭はこの校舎改築の運動推進に当たつて、小才の利いた小葉田を腹心にしていたようすだ。しかし運動が成果を見せ始めるにつれて、教頭は一人自分の力でプランを練つたとして彼を黙殺しだした。それから四月の人事異動の時も彼は危うく辺びな分校にやらされそうになった。内示の日から小葉田は北側の校舎の一室に籠もり、職員室には顔も見せなくなつた。そういう彼を桑沢は訪ねていったことがあつたが、彼の無言の抗議は校内の教員組合を動かして、それをやつと食い止め得たのである。

小葉田が閉じ籠もつていた部屋の板戸の辺を、いつしか光の環は浮き上がらせていた。彼は戸を開けて中にはいった。油絵具の臭いが体を包んだ。そこは美術科の教室だった。照明をつけずに懷中電燈の光を部屋中に這わせた。生徒達の習作が壁に掛けてあつた。人物像や静物が描かれていたが、淡い光の中でどれもが無彩色に見える。中には見覚えのあるような顔も浮き上がってきた。桑沢は光を消した。視界がすべて奪われた。

闇が幾重にも色濃く塗り込められていた。それを一つ一つ剥がすことは桑沢にはできかねた。でも時が経つにつれて闇の中の層がむこうからめくられていく気がした。闇の中に濃淡が形造られていく。

室の中央に事務机が一つ置かれていて、その前で向こう向きに男が肩をいからして盛んに仕事をしている。闇の奥にそういう姿が彷彿として浮かんできた。男は小葉田教諭に違いない。

男は向こう向きの姿勢のまま、桑沢さんですか、と聞く。

——いつかきつと貴方がきて下さると思っていました。

男はやはり向こう向きで話し続けた。

——話し相手が欲しかったんです。でもうちには他にそんなやつ、いそうにないですね。

——教頭でなくても、いざとなれば結局自分のことを可愛がりたくなるのは当然でしょう。ですから彼個人を憎んで見ても始まりませんが、でも、ぼくはいつかは何らかの形で彼にレジスタンスをするつもりです。こんなところに籠もつたのもその最初の行動の一つです。

——こうして私自身黙って負け犬のように凝っとしてはいるのだけれど、それは表面上のことで、裏ではしかるべきところにちゃんと手を回しているのですよ。人事の最終発表ではちゃんと元の鞆に収まっていますから見て下さい。

——校舎改築なんてお祭り騒ぎみたようなことも、いわばどっか目に見えぬところであやつられているんですね。事実上、出雲市にとっちゃ農業高校なんていらないんじゃないですかね。運動しなくてもいずれば辺びなところへ追いやられる運命をもってたんです。

——ところで、さっき、『しかるべきところ』といったんだけど、実は貴方のお父さんのかつての部下に当たる人でね。ご存知ないと思うんだけど……。まあそんなこと知ってたから平生いつも口を利かなかったけど、心のうちで何か通じるものを感じてて……。・。

男は台本を読み上げるような調子で、そう話した。

桑沢はだいぶ前に聞いた小葉田の話をそこで反芻していたのだった。そして午前の体育館の中での彼を思い起こした。彼のレジスタンスは今日も行なわれたのだと思った。しかもそのレジスタンスが自分を今日弄んだことになったのだと思った。しかし、今この室にはいつて彼のことばを反芻したのは、その「部下」なる人物はどんな男だろうと思ったからに違いなかった。無論それは今知るよしもない。

桑沢はその室を出た。

光の環は彼の進行と共に前に動く。窓の外の月光が隣りの体育館の屋根を濡らしていた。桑沢は心の中で何度も「レジスタンス」ということばを呟いていた。自分が今年の春小葉田の籠もっている部屋を訪ねていったのは、全く本能的なものに突き動かされていたのだ。

前任校であるH市の商業高校に赴任した頃、母とは変な別れ方をしていった。父の遺言に背いて教員になった自分を、母は快からず思っていたのだ。母がどうして父の遺命を尊重したかはいまだに分からない。H市への出発の日、どうしてもついていきたくないといい出してこずらせた。地域の者から白い眼で見られても、新川廃川地で暮らすがいいといい張った。

母を一人残して彼は見棄てるようにH市に立ったが、月々の金はきちんと仕送りした。そして二年間はほとんど家に帰らなかった。新川も同時に見棄てたかったのだ。

しかし、二年目の春、遠足の時、女生徒が死ぬという事故があった。うけ持ちだった桑沢は当然責任を追及されることになった。でも彼は一方的に罪を押しつけられたような気がして、頑として非を認めなかった。当然彼は孤立することになった。口を利いてくれるものもいなくなった。桑沢は全く頼るものがなくなった。彼は彼自身のレジスタンスから孤立してしまうことになった。

だから小葉田のレジスタンスは、桑沢にとって他人事でないように思えたのだ。そう考えると、今夜こうして巡視をしていることや、昼の映画会も含めて一切が因縁深く思えてきた。もとはといえば、父が長年勤めていた今の学校に転勤をしたことに端を発していた。

桑沢は懐中電燈を持つ手に、いつしか力がいっているのに心づいた。そして改めて夜の闇を押し包む校舎の重圧感を感じた。夜の校舎は際限もなく闇を呑み込んでいた。その中を頼りない明りをともし、巡視する自分の姿を思うと、無気味というより、消え入りするような感じにさせた。彼はもう一室一室を確かめるのはやめにした。

でも桑沢は、北の校舎の階段を登りながら眼前の突き当たりの一室だけは戸を開けて見たい誘惑にかられた。

板戸の前に立つと彼は逡巡した。しかし、後ろから何か強く突かれる思いがして、中にはいった。父の写真を発見した文芸部の部室だった。

彼は懷中電燈の明りをわざと消して見た。覚えのあるカビ臭い空気が充満していて安らいだ気持ちになった。手探りで椅子を探し当て、腰かけて見た。するとその時を待ちうけていたように宿直室での園田の会話が息を吹き返してきた。

しかし、園田の話聞いた時は、最も知りたいことを今日まで聞く機会がなかったことを恨めしく思っていたようだったが、今思い返して見ると、それもどこか遠い所の出来事のような気がした。彼は自分の吐く息が酒臭いというより生臭い魚臭のように思えてきた。闇の奥へ何度となく息を吐きかけて見た。

警備員の園田は、年配らしく酒を飲まない時と変わらないように、気持ちを押し殺したような物いい話をしてくれた。

園田の家は運よく昭和九年の水害の際には田畑が水没しただけで難を免かれたという。桑沢さんの家は跡かたもなく流失してしまつて気の毒なことをした、と前置きした。

当時正俊に少し遅れて学校勤めをしていた園田は、かつての仲間から「法華経堤防」決壊後の復旧作業に出てくれるように要請を受けた。そしてその時に園田は総指揮に当たっていた金山技師に、「新出雲結い」の考案者である正俊を、現場に出させてくれるように推挙し、即刻避難先で待機していた正俊は招集されることになった。

九月二十五日。正俊が作業服に身を固め現場に着いた時は、新川上流の分派口「松葉堰」は締切工事が進められていた。これに要した人夫は二千人であつたという。

二十六日から復旧の作業は開始され、川倉の組立て、笹戸の製作が始まつた。測量班は仮堤の位置の標杭を建て、堀川掘削の区域を示した杭木を打ち込んだ。

「法華経堤防」は二つの小高い山の間をつなげたもので、その両端からは山の裾が土手の線をなしていた。流水はその狭間の一番弱いつなぎ土手を食い破つたのだった。濁水は一旦山に堰止められ、そこから二つの流れになって西方と東方に奔流したもののようだ。

正俊は先ず測量班に加わつて計測をしていたようだったが、決壊地点に立つと、ただ放心したように流れ落ちる濁水を眺めていたという。園田は川の中から何度も正俊を見上げ、何だか不審に思ったが、その時は見過していたようだ。

二十七日。水止め現場の準備工作は不充分ながら仕上げを向えつつあつた。組立てられた川倉は法線の位置に並べられた。正俊は「新出雲結い」の製作指導に没頭していた。

水止めは概ね次のような工法で行なわれることになったという。

欠損箇所から流れ落ちる水流は、その頃には川幅一杯には流れていず、兩岸の間の川床を蛇行しながら流れ下つて、流水のほとんどは欠損箇所に注いでいた。だから工事の眼目はその流水をいかに処理するかに置かれた。堀川を掘削して幾分でも下流へ流し去るようにし、欠損箇所の西方やや隔った地点から、蛇行する本流に向けて連台を百米ほど連ね、欠損箇所の東端からほぼ百米余り沖の川の中心部の砂洲から本流に向けて、東から順次二百五十米位の長さに川倉を連ねる。そして、本流堰止めには百七十米ほど「新出雲結い」を並べることによつて達成をしようということになっていた。それから、残る東方の隙間は砂堤を盛り上げるようになっていた。

だから正俊の「新出雲結い」はこの工法の主役を担っていたことになる。正俊にとってはまさに晴れの舞台だったし、その水制の出来ばえを試す実験場だった。

正俊はしかし、浮かぬ顔つきになり、園田に、「ここが俺の墓場になるかも知れぬ」と洩らしたという。園田は、その時は何の気なしに聞いていたという。金山技師は仔細にその組み立て方を正俊に聞き、つよい関心を示したようだったが。

二十八日。この日は堀川掘削に全力が傾けられた。一千人の人夫が六百米の長さで幅二十米の開削路に挑んだ。一方川倉班は、川倉に横木を取り付け、笹戸を掛けた。そして土俵を据え、砂も盛られ、仮堤も一部出来上がった。上流の取り付けも、約百米の連台は杭木が打たれて横木がつき、控えの斜材も取りつけられて仮砂堤がほぼ出来上がった。

決死隊は三十五基の「新出雲結い」を全部組み立て終わった。そしていよいよ明日決行という所まで漕ぎつけた。

正俊は園田の止めるのも聞かず決死隊に志願した。

そして、ついに二十九日がきた。

六時に一同は一斉にはね起き、現場の川水で嗽ぎ、顔を洗った。宿舎からは握飯と竹皮包が届けられ、腹ごしらえをするや、資材の運搬をし、十一時半にそれが終了。そして、午後一時に作業開時の突撃ラッパが川土手になり渡り、二千三百人の砂掻隊が八百米上流から砂を掻き始めた。それぞれ所属を代表する幟を立てて各次鋤簾を持って、川中の砂を掻き流勢を利用して砂を下流の「新出雲結い」取り付け口付近に流して盛り上げる。

百名の決死隊はすべて赤い鉢巻、縄の帯といういで立ちで、取りつけ口付近に待ちかまえている。正俊の持ち場は水制運搬分隊であった。ほとんど首まで水につかり必死に作業をしていたという。

「新出雲結い」は着々締切線上に並べられた。そして、笹戸分隊が直ちに笹戸を取り付ける。土俵分隊も見ると俵を笹戸の前に積む。この時砂掻隊は多量の砂を準備して待っていて、水制の前に盛り上げる。

この間実に二時間半を要し、締切線に二千三百人が入り乱れて、壮観この上なかったという。そして堰き止められた本流は湖水のように見る間に水位を高め、午後三時五十分には堀川をとうとう流れ下り始めた。完璧の仕上げだったのである。

一同は互いに抱き合いながら喜んだという。

話を聞きながら、桑沢はもどかしく思った。父の正俊のことについてはあまり詳しく述べようとしないで、むしろ冷静に事実のみを淡々と述べるやり方だった。

父はそれからどうしたんです。決死隊にまで加わっていながら、どうして地元から疎外されねばならなかったのですか。

いや、それからはあまり話したくない。

どうあってもそれが聞きたいのです。

——そんなにいうのなら少し話しましょう。桑沢さんが手がけた「法華経堤防」の護岸工事に重大なミスがあったんですなあ。それは金山技師があの調査で指摘した事なんです。自分はその方面の専門家ではないから詳しいことは知らないんですが、堤防のつけ根を固める石垣の位置が悪かったんだそうです。それが桑沢さんの命取りになった。でもそれはもう終わっていることです……。

桑沢はどれほどその部屋の中に座っていたのか、自分でも分からなくなった。

正俊の青ざめた顔は遠のいたり近づいたり、闇の中で漂っていた。積まれた古雑誌や古新聞の山が時として正俊の体に思われて戦いた。

すると、後ろの戸をノックする音がした。園田だった。

——あんまり遅いもんであちこち探し回ったんです。こんな所にいたんですか。寒くないんですか。さあ、早く部屋に帰りましょう。

園田の懐中電燈の明かりを頼りに、廊下を渡っていった。

園田の、後ろから見る姿は、濃霧の中を漂っているようで、時折、視野から消えたり、間近に立ち現われたりする黒い団塊に思えた。右廊下の上をその影は音もなく渡っていく。桑沢は父の幻をそれにした。こうして従順にそれに付き従っていく自分はどうなるだろうかと脅えた。廊下が長い長い道に思えた。それは時として、川の輝きを見せた。月光を受けた水面を、水煙に巻かれながら遡る二人の姿を思った。

暗い道の行く手にぼっかり口を開けた薄明るい出口のような穴が見えてきた。前にいる男の影は、その穴を避けて左に折れて消えた。彼はその薄明るい光の中へ逃げるように駆け出した。

彼は正面玄関の廂の下に立っていた。玄関の入口一帯には月光が青白く溢れていた。それから彼は又、駆け出した。正門の門柱の間を駆け抜け、桑畑の中深くはいりこんだ。昼間見つけた新道の近くまで着くと、徐に校舎をふり返った。窓も、屋根瓦も、壁板も、何も見えなかった。ただそこには青黒く大きな物体が立ちはだかっているだけだった。

(了)

(注) この作品を書くに当たって、『斐伊川史』(長瀬定市編)を随所に引用させていたできました。深くお礼申し上げます。